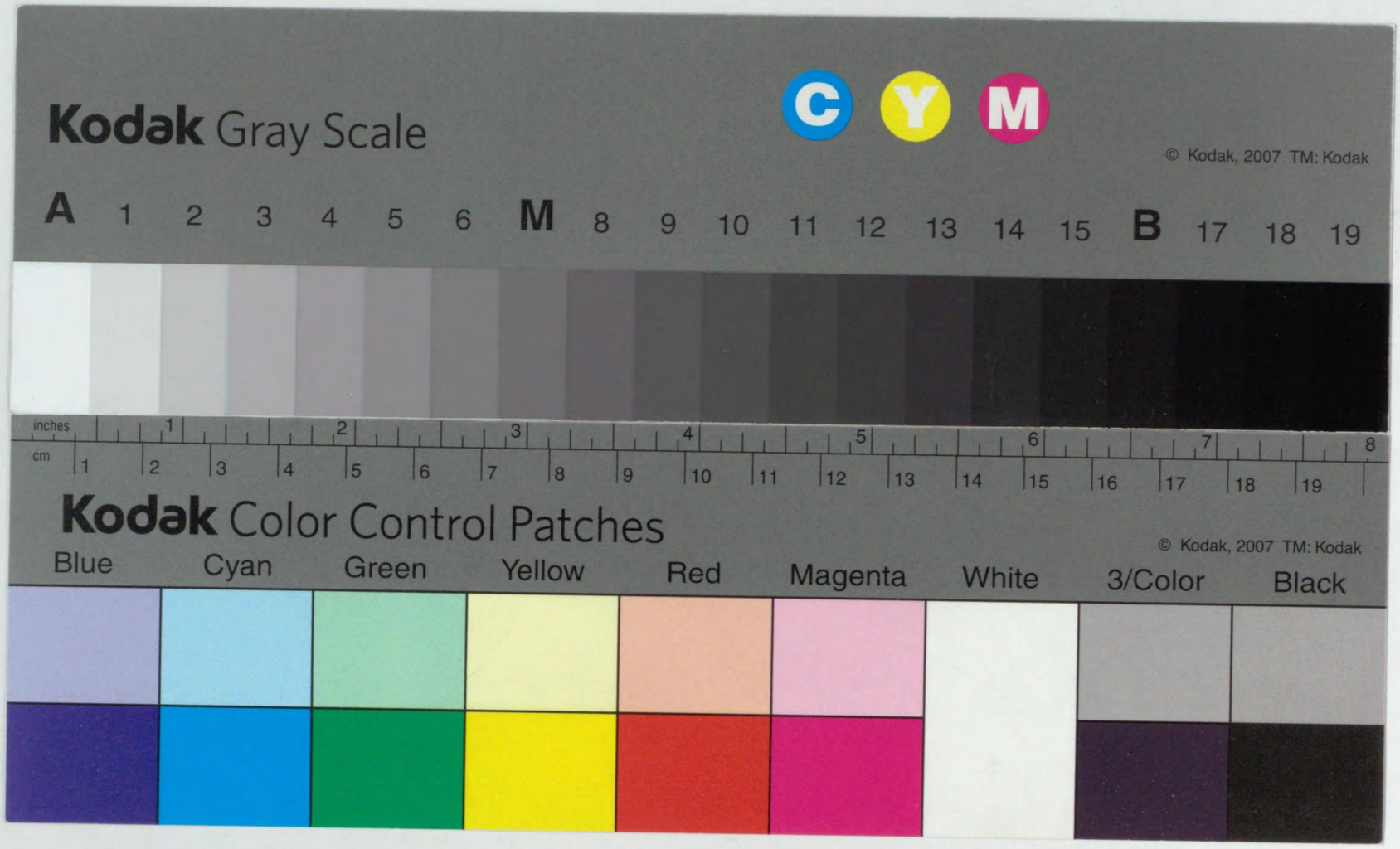

Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

187
499

惟神皇置歌

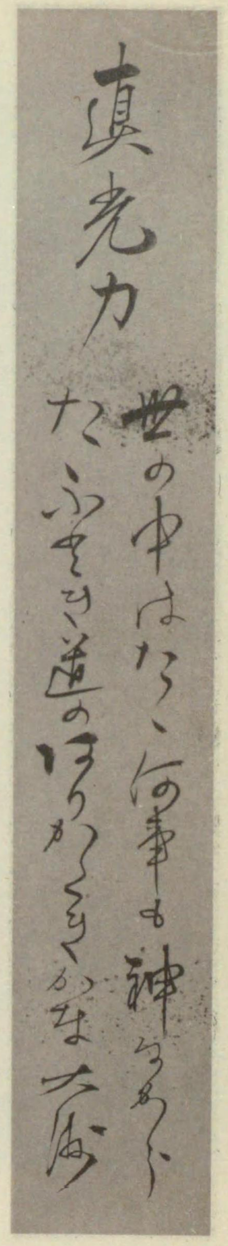
一名真澄鏡

友枝速水著

発行者寄贈本

大正
15. 8. 11
寄贈

NONOMIYA
KUDAN TOKYO.



友枝速水君の
計に接して

すめらぎの道語らまく目を欲りし
速水の大人は移ろひにけり

現身はうつろひぬともすめ國を
守ります大人の靈は彌常

常へに追ひ進みませ御名のごと

我日の本を祓ひ清めて

紀元二千五百八十六年
大正十五年一月二十五日

筧　克彦

大洲友枝速水畧歴

父速水嘉永四年八月六日をもつて福岡縣築上郡友枝村に生る。その父を川島兵作親宗と稱し母を松子といふ。十五歳の時大分縣中津町渡邊重石丸先生の道生館に入學し、初漢學を修め後心を皇學に傾く。慶應三年十七歳の春水戸の碩儒會澤安先生の新論を讀み深く感ずる所あり。益皇道研究の志を堅くし、二月廿五日天滿神社に於いてその素志の達成を神明に誓願せり。渡邊先生特に日課外に夜中塾窓に來り父の爲めに皇典を講ぜられたりといふ。明治元年渡邊先生朝廷の召に應じて東上せらるゝに及んで、父は先生の盡力により長洲の人宍戸昇之輔氏の紹介狀を得て、同年十二月長崎に赴き、丸山作樂先生に謁し皇道研

究の志を述べ教を乞ふ。丸山先生これを嘉みし大に努力する所あるべきを諭す。然るに翌二年二月丸山先生また東上せらるゝことゝなり、別宴に於いて特に父に諭しけるは「吾れ天に代りて皇道研究を令貭(オホス)ぞ、之を名として成功せよ、文字は大洲と書く可し」と。爾來號を大洲と稱せり。

かくて父は先生の歸崎を待つこと一年有半なりしも先生には朝廷奉仕のことゝなりしかば、失望して郷里に歸り、恒遠精齋先生の藏春園に入り專ら漢學を修むることゝなれり。

然るに明治維新當時に於ける我が國狀は王政復古により表面統一を得たる如きも、實際に於いては各地方各階級の間に種々の困難なる問題頻々として起り混亂紛糾甚しきものあり。父は明治五年八月丸山先生が國事の爲めに

長崎の獄に投ぜられたるの報に驚き、深く時事に慨して增田宗太郎氏その他の同志と共に東西に奔走し畫策するところあり。これが爲めに官の忌諱に觸るゝに至りしも、幸にして幾程もなく赦され郷里に歸るを得たり。明治八年生家相續を弟善三郎に讓り友枝家に入る。

明治十四年丸山先生朝廷の恩典に浴し東京に歸らるゝと共に忠愛社を創立し、明治日報を刊行す。父この時先生の許に赴きその事業に與ることを約するところありしが、偶本家友枝誠治の死に遭ひて、止むを得ず東上を中止して家事を視ることゝなれり。

明治十九年福岡縣會議員に選ばれ、縣政に參與す。公私の用務多端なる間にも、常に心を皇道研究に注ぎ、翌廿年一書を著す、「斯道大要」是なり。

同年六月頃築上郡八屋町神職高橋一馬氏の妻增子刀自靈異のことあり、父深く感ずるところあり、神道研究會を開設し、專ら神道の弘布に從事せり。かくて父は天地山甲神社經營の任に當りしが、次第に地方人民の崇敬を集め神威赫々たるものあり。

明治廿八年二月東京に上り丸山先生に謁す。先生儀容を正しくして、その學統を繼ぐ可きを命ず。父その微力淺學の故を以て固辭せしも聽されず、先生が「多かりし門人達も今は四分五裂して眞に我が志を繼ぐべきものは汝一人なり」と言はれたるに感激して終にその命を奉ぜり。先生直ちに夫人梅子刀自・令嗣正彦氏を列座せしめ神酒をもつて誓約をなさしめたり。この時先生父に賜ふに上記、楠公祭天鎭宅鈴、賀茂眞淵・本居宣長・平田篤胤三大人の書翰・短册

外數點をもつてせり。父是より一層志を勵し心を專らにして、皇道の研究とその宣布とをもつて己が任とし、自宅において毎月二回說教をなし、また地方を巡回して講演せしこと少からず。寸暇あれば則ち筆硯に親しみ書を著すをもつて樂とせり。高橋增子靈異記の如きは百八十五卷に達す。その他眞哲理・三夜問答・神德不可思議錄・天津御光・天地山神德本紀畧・御神號演義略・天地山獨語・斯道頌等あり。

父齡六十餘歲に及びて、爰に畢世の事業として神道の組織的研究を志し、大正十二年に至りてこれを全うし、「皇道十觀」と稱す。同年七月末この書を鄕里豐前に於て印刷に附するの目的をもつて歸國せしに、八月六日より重患に罹り、更に關東地方大震火災の爲め甚大なる精神的打擊をうけしにも拘らず、その事業を繼續し同年十二月漸くその完成

を見るを得たり。

身如木偶蓄音器　自性僅存明道志　天地神祇靈護光
虛心感覺十觀記

これ當時に於ける父の述懷なり。大正十三年四月この書畏くも　天覽並に　台覽の光榮に浴し、父の歡喜この上なかりき。更にこの書を　伊勢太神宮を始め全國の主なる神社に奉納し、また朝野の有志、知友に贈呈せり。その後更に筆を執り、「惟神皇道歌」三卷を著す。父平素　明治天皇を崇敬すること厚く、明治天皇御製集に唱和し和歌數百首を詠ず。名けて「御蔭歌」といふ。

昨年十一月「惟神皇道歌」の出版と家事上との用務を兼ねて、暫時鄉里に歸ることゝなれり。この時歌あり、

故鄉にかへるはうれし都べに
のぼるその日を今よりぞまつ。

十一月二十五日東京を發し翌二十六日朝下關に着す。鎭西の山を見て喜にたへざりけん、歌あり、

道のため身をつくしじの故鄉に
かへるけふこそうれしかりけれ。

日記を見るに、父大正十二年夏大患に罹りしも幸にして平癒し同年十二月上京せし時には、再び故山を訪ふことあるまじきさへ覺悟せしが如きも、その後全く健康を恢復して茲にまた親しく鄉里の山川に接するを得たれば、その喜を表すにこの一首をもつてせるを知る。

父十五歲にして家を出で學に志してより、弟善三郎と年頭の賀を共にせしことあらず、六十年を經て本年に至り相共に元旦を祝し得たるをもつて深くこれを喜び、一詩を賦

して感慨を述ぶ、

立志由來六十年　安危歷々在身邊　眞光照徹恩無極
今日遭春彌樂天。

然るに一月三四日頃より感冒の氣味あり。醫師の注意を受け專ら療養に努めしも、遂に肺炎を併發し病勢日に加はる。病重きに及んでも、語るところは悉く皇道のことならざるなく、片語も一家の私事に及ばず。たゞ神恩の高大なるを讃嘆するのみ。醫藥看護もその効なく、二十二日午前七時四十分溘焉として逝く、享年七十六。千家大社教管長特に父生前の功勞を賞し、權大教正を追贈し賻を賜ふ。今「惟神皇道歌」印刷成るに際し、茲に父の畧傳を記して序言に代ふ。

大正十五年六月二十二日

男　友枝高彦
男　友枝照雄　誌す

惟神皇道歌 一名 直澄鏡

目次

開題

歌の言義……一

第一編 神代上卷……六

第一章 高天原一名大虚空……六

第一節 隱御身神……六

第二章 天地泉成象……一六

第一節 一物混沌……一六

第二節　天地剖判……二三
第三節　大地性德……三九
第三章　皇祖二神世界開闢……四三
第一節　皇天賜勅二神……四三
第二節　自凝島成……四四
第三節　二神結婚……四五
第四節　生大八洲……五二
第五節　生萬神萬物……五七
第六節　五元神出現……五七
第七節　火土神德生保食神……六三
第八節　石隱神避……六四
第九節　斬迦具土神……六七
第十節　大神往還泉國……六八
第十一節　生死天則……七三

第十二節　禊祓……七四
第三章　宇宙統御大憲章……八三
第一節　統天勅宣……八三
第二節　皇祖大神還天……八七
第三節　日月大神劒玉誓約……八八
第二編　神代中卷……一
第一章　月威滔天……一
第一節　月神殺保食神……一
第二節　保食神靈瑞……二
第三節　月神暴威……五
第四節　萬神奉禱……八
第二章　眞光力照徹……一五

第一節　新宮御遷座……一五
第二節　宇宙清明……一六
第三節　月神處罰……一九
第四節　日神授二三女神一……二一

第三章　神速須佐之男神經世神德……二三
第一節　天外巡歷……二三
第二節　國家經綸輕重……二四
第三節　斬二妖蛇一得二神劍一……二五
第四節　造二須賀宮一並八雲神詠……二九
第五節　神子性德……三一
第六節　大小須佐田……三三
第七節　御年皇神等……三五
第八節　國引神業……三七
第九節　大國主神出現……三九

第十節　月神入二根國一……四〇

第四章　大國主神建國神業……四三
第一節　聖仁救免……四三
第二節　入二根堅洲國一……四六
第三節　聖慮神活氣宇呑レ世……四九
第四節　大命降下……四九

第五章　建國大業……五一
第一節　征二伐八十神一……五一
第二節　八上比賣神……五二
第三節　少彦名神出現……五三
第四節　五百個神鉏……五四
第五節　固二造浮漂國地一……五五
第六節　藥湯溫泉開基……五六

第七節　少彦名神入二常世國一……五七
第八節　大物主神出現……五九
第九節　御年神靈瑞……六〇
第十節　徵二行沼河比賣家一……六一
第十一節　國主嫡后萬世照臨……六三
第十二節　大國主神御子神等……六九
第十三節　佐太大神生……七一

第三編　神代下卷……一

第一章　皇子忍穗耳命受二天降詔命一……一

第一節　天祖大御神勅命……一
第二節　稚日子死尸葬レ天……四
第三節　味鉏高彦根神弔レ喪……五
第四節　普都大神天使選定……八

第五節　天軍元帥天降……一〇
第六節　武德玲瓏……一三
第七節　大國主神獻レ國……一三
第八節　皇都近守神……一六
第九節　出雲國鎭坐……一八
第十節　造二天御舍一……一九
第十一節　献二平國廣矛一……二〇
第十二節　神賀吉詞……二二
第十三節　獻二天御饗一……二三
第十四節　普都大神巡レ國……二三
第十五節　普都大神還レ天……二四
第十六節　昇レ天陳二誠款一……二五
第十七節　天地人三大德……二七

第二章　天孫命統二御葦原中國一……二九

第一節　天孫命登極……二九
第二節　天位神璽勅授……三〇
第三節　猿田彦大神奉迎……三八
第四節　皇孫命天降鹵簿……四〇
第五節　高千穗峯名起源……四二
第六節　皇美麻命巡幸……四五
第七節　詔二勅天宇受賣命一……四七
第八節　請二受天水一傳……五〇
第九節　天水請受一傳……五一
第十節　天神壽詞奉齋……五三
第十一節　三山競鬪……五六
第十二節　大山祇神奉二進二女一……五七
第十三節　二皇子健生……五九
第十四節　天皇崩御……六三
第十五節　二皇子海幸山幸……六三
第十六節　入二海神宮一……六七
第十七節　奉迎一說……七〇
第十八節　海神奉レ問二來由一……七〇
第十九節　失鈎發見……七一
第二十節　火遠理命還二本宮一……七六
第二十一節　海濱產屋鵜羽葺草……七九
第二十二節　穗穗手見命崩御……八四
第二十三節　海陸神皇親……八五

惟神皇道歌目次終

惟神皇道歌　一名眞澄鏡　上巻

大洲　友枝速水謹著

開題　歌の言義

其一

歌は浮き立つ心にて
音色に現し自からも
善きも悪きも樂みも
心平らに隔てなく

其二

歌の初は皇祖
御心靡けたゆ〳〵に
えをとこえをとめ語り合ひ
思ふ心の訴へぞも
人にも知らす聲の色
怒り悲み憐みも
出すが心の訴へなり
諾冊妹妖大神の
訴へ給ひてあなにやし
打ち撓み寄る風情を

うたげの初と謂ふべきか

其三

浮き立つ心は天地の
幸ふ言靈國の歌
浪も鎭り雨も降り
天つ祝詞の太詞

其四

千萬物は悉く〳〵
磯打つ浪も吹く風も
雨雷も降る雪も
蛙や蟬の鳴くもみな

其五

神代の昔神々〳〵は
御心こゝろいさみ聲高く
一二三四五六七八九十

浮き立つ歌や是れならむ
神も愛でます奇御魂
言葉の花と咲き匂ひ
怒り悲み慰みけり
畏き御歌は是れにこそ

歌なき者や無かるらむ
流るゝ水も燃る火も
鳥の聲々〳〵虫の音も
心を問はゞ歌と知る

天の岩戸の開く時
我を忘れて諸共に
百千萬と謠ひまし

日の大御神出でまして
八百萬神面白く
阿波禮。阿那於茂志呂。

其六

日の大御神天地の
幽居り給へば世は暗黑
御出御あれば世の中は
惟神なる皇道

其七

此の大道は天地の
天つ諄詞の太祝詞
傳へ傳へて日の本の
御稜威畏き光にて

其八

神語りなる古事を
天地明く照り渡る
手を伸し歌ひ給へるは
阿那多能志。阿那佐夜憩。飫憩。

嚴の御魂と照徹る
神人共に道迷ふ
忽ち晴れて浮き立ちつ
歌へ舞へ人世の光

開くる時より神ながら
其時々〳〵の神語り
國は治まり天皇の
萬世國の力なり

御代繼々〳〵の帝紀

古事記に傳へ來て
千代萬世に守る道
彌榮え行く御代の幸

其九

神ながらなる道の歌
尊き道と眞心に
神の御光照り渡る
晴れたる心天地に

其十

惟神とは神代より
神習はむと眞心に
斯道守る人の身は
尊き光天地の

其十一

惟神なる皇道
神代ながらの其の狀を
日本國の生命なり
歌はざらめや國民は

謠ふ心は浮き立ちて
仕へ奉らば玉幸ふ
心の曇り晴れ行かむ
伊照り徹らす世の光

流れ來りし神の道
盡す正道皇道
人にはあれど神心
共無窮に榮ゆなり

天地無窮榮え行く
日の本國の御光は
天つ日繼の御代永く
心樂しく面白く

世の中廣く照り渡り
國民共に彌增しに
あなさやけおけ天晴道

第一編　神代　上巻

第一章　高天原一名大虚空

第一節　隠御身神

其一

天地未だ成らぬ時
其の神の御名先成るは
次には高皇産霊神
此の三柱の神は並
此三柱神は古事記を本とし古史成文に依る

其二

三柱神の成る後に
高皇産霊神なるは
大虚空中に成りませる
天之御中主神
次には神皇産霊神
獨神成り隠御身
津速産霊神成りぬ
所謂神魯岐命なり

神皇産霊神なるは
津速産霊神を亦
此の神名は古語拾遺を本として注意せり神魯美神留彌異字同神なり
所謂神魯美命なり
神留彌尊と傳ふあり

其三

天地未だ成らぬ時
天地を成す御期待の
形象の成るは後にして
御魂の前の元御魂
成りませる神の御心は
疑ふ道ぞ無かりける
道先づ立つが御魂なり
是れ大虚空の大御魂

其四

大虚空中の大御魂
隠身なるは奥御魂
天之御中主神は
後なる神は御子の神
成るは成れども隠御身
大虚空中に一柱
前にも後にも神は無し
此の神も亦隠御身

其五

御子神三柱成りませり
高皇産霊は天つ道

神皇産靈は國の道
御魂は滿ち足り圓き道
滿つる中には足圓もあり

其六

滿つるは光足るは地
圓には廻るの型もあり
天地泉の三つの道
道を分てば父と母

其七

大虛空光に色はなし
光は奇日の御稜威にて
乾坤陰陽を分ちあり
造化の道ぞ現るゝ

其八

天とは明燃え光なり
津速産靈は泉つ道
滿足圓は一つ皆含む
足り圓る共に滿つるあり

圓は底立つの丸き道
始と中と終あり
成らぬ先より定れり
子は父母の持つ身なり

大地光は底に立つ
地は積持力なり
天と地とは相待ちて
心と身との型は是れ

眞中天つ日　月と星

大地是れも光あり
日の御光は數多なる
高天の原を統御すとは

其九

隱れてもある御魂こそ
頭は天魂其の中に
事物に觸れ現るゝ
心の光身にぞ持つ

右は倭姫命世記に元レ元入二元初一本レ本任二本心一とあり寶基本記に人は天下の神物なりとあり日本書記孝德天皇詔曰惟神(惟神者謂隨二神道一亦自有二神道一也)とある等に依り如レ此述べたり

其十

天地なるは宇宙なり
只大虛空の儘なれば
其の大虛空に神として

遠く望めば一つ星
星の國々照徹す
御虛空を明す力なり

人の身見ても悟られ
我も覺えぬ力あり
其の狀こそは奇びなれ
皆神ながら神物

天地日月星もなく
空間時間定まらず
先づ成る神は御中主

主神の御子三柱の

産靈の神は成りませり

其十一

神とは釀む身產靈なり
烝揚げ籠持ち閉ぢ結び
本の力を神と謂ふ
隱るゝ神は隱御身

其十二

開く斗りが神ならず
高皇產靈と神皇產靈
大本御魂の主の神
中は無所鳴所成所なり

其十三

高皇產靈神御魂
神皇產靈神御魂
津速產靈神御魂

組み籠み國も結ぶなり
天地萬象其の道の
神は輝く身の光
開きつ閉ぢつ御魂なり

閉づる斗りが神ならず
津速產靈と玉留と
伸びつ締りつ中に立つ
大虛空滿つる隱御身

光り開くの大極眞
締る光りの積極眞
個々なる光消極眞

大積消極中の主

其十四

御中主とは眞中主
中とは中間內外なし
無極の中は無所にして
無所に道なし道ありて

其十五

產靈は烝す日の初にて
烝す日は淸音純義なり
日は天に立ち結昌體
大虛空妙靈出る身の

其十六

空しは實なし體成らず
出ねば有りて無き如し
光ありてぞ隱身の

有無眞空の無極眞

眞中は圓中一圓天
大虛空中は無極なり
何物もなき眞虛空
產靈の御魂成所となる

靈の濁音は複義なり
靈は普遍性虛空なり
身ありて滿つる光なり
嚴の御魂と照徹る

實に充實て定まれり
有る魂出る是れ身なり
御蔭あるなり天地の

成ざる時は道も無し

其十七

生るとは始成る終り
終無ければ功なし
天地泉の成りたるは
天つ光は眞中主

其十八

嚴の御魂は照り渡る
明も暗も道なれど
迷はぬ光正道と
暗路の狹霧拂はずば

其十九

大虛空中を眺觀れば
高く開きて晴れたるは
靜に壁立つ狀なるは
高皇產靈は高日なり

其二十

始終は一つなり
功成らねば元返り
大虛產靈の奇御魂
嚴の御魂の道は是れ

其廿一

光に暗は無かりけり
暗には迷ふ心あり
玉を磨くの暗路かな
國は常暗如何にせむ

其廿二

大圓無極御中主
高皇產靈の神性か
神皇產靈の神性か
虛空に滿つる微分質

其二十

大虛空中に成りませる
道は立てども象なし
御中主神產靈神
御魂の力現すも

其廿一

奴と伸び開く大御稜威
無所の御心自づから
其の現るゝ荒御魂
津速の魂に非ざれば

其廿二

浮立ち動く魂あれば
奴と志の力相對ひ
高皇產靈神なるは
津速玉留產靈にや

其廿三

神の御魂は此の如し
象無ければ力なし
如是て止むべき事ならじ
活動くの道あらむ

其廿四

志と締め閉る御力は
爲す所の道と現れむ
是れこそ津速の魂ならむ
大御魂神動かれじ

其廿五

退き止る魂あらむ
津速心や躁ぐらむ
動く力の幸御魂

神皇産靈神なるは

其廿三

開き動くの其の力
閉づるの力後を追ひ
開くは火の性浮燃えむ
開き閉づるを結ばすは

其廿四

次に次にと成りますは
開く力は幸御魂
始とも成り終とも
所謂天理の大元は

其廿五

高皇産靈は天つ道
神皇産靈は國つ道
大虛空中に彌綸つべきは

閉づる力の和御魂

先づ大虛空に彌綸り
引き返さむと爲るならむ
閉づる水性引き締めむ
是れ奇御魂御中主

御中の主の道ならむ
閉づる力は和御魂
合ひつ分れつ產靈なり
此の時よりぞ成りぬらむ

活動くの生魂
靜に立つの足魂
光ならでは物あらじ

光に添うて持つ力

其廿六

津速產靈は天地の
皇產靈神の子と成りて
定め無き身の元御魂
根の國底の國にして

其廿七

獨神成る其の道は
增す事も無く減る事も
隱身なれど定あり
津速玉留神速魂

其廿八

玉留魂は魂止り
神速魂と立還る
死るは生るの初なり

水ならざれば滿ち難し
中に通ひて飛び翔り
大虛空中を浮き沈み
天地中の泉國は
玉留魂の道は是れ

獨自實ります御魂なり
無く大虛空の隱御身
之を成るとは稱へけむ
始とも成り終とも

生足魂の終にて
晦日朔日變る道
其の早變り速魂か

佛の教往生は

其廿九

隠御身とは大虚空の
活動くの其の狀は
物の象と現れて
實力無ければ道立たず

其三十

形は影立つ象狀にして
御魂翔りて影と爲り
隠れて見えぬ大虚空に
天地泉の基成り

第二章　天地泉成象

第一節　一物混沌

其一

此の道をこそ謂ふならめ

其の神性の事にこそ
御魂の力現れむ
實力とこそ爲るならめ
有りとも無しとも云ひ難し

影は御魂の翔りなり
影固りて形成る
御魂の力滿渡り
天つ御光御魂主

大虚空中に一つ物
浮雲根係る所なく
天地剖れず陰陽分れず
泥の中より葦牙の

其二

一つの物の其狀
浮つ沈つ閉ぢ開き
上とも下とも左とも
續くも絕ゆるもありぬらむ

其三

一つの物は大虚空の
浮雲漂ふ如しとは
氤氳浮動は陰陽氣
產靈の神の幸魂

其四

成りて狀は言ひ難し
漂蕩ふ如く浮き沈み
鷄子の如渾沌れて
萌騰る如く物成れり

言ひ難しとは定らで
燃ては明く曇る暗
右ともならむ縱橫に
大虚空中を漂蕩うて

唯一つなる型にこそ
意義ある比喩と謂ひつべし
水火の元氣烝し動く
起る初と謂ふべきか

漂蕩ふ中に自づから
明は明暗は暗
開くも閉づも質を成し
天地泉の成立つも

其五

浮雲成すの元質は
津速神速玉留と
分子靈子も細胞も
皇産靈神の造化道

其六

高神皇産靈皇と稱へ
速とは變る個々の神
高皇産靈は生魂
津速産靈は終始して

其七

將に開闢る時の狀
明は廣く暗狹く
合ひつ別れつ變るらむ
此の理と知らるなり

津速産靈神ならむ
即生即滅早變り
此の神德と知らるなり
此の神無くば如何にせむ

其八

津速神速速と號ふ
統持つ身には非ざらむ
神皇産靈は足魂
玉留魂と稱ふるか

生魂とは開發力
玉留魂は終結力
父母と爲り子と爲りて
始中終あり離るなし

其九

玉留魂は魂塞り
修學規則の卒業證
顯世幽世道ありて
足魂とは其の時に

其十

浮雲の狀漂蕩ひて
定らぬ間の迷ひ時
夜にも非ず朝まだき
混沌れたる物一現象

足魂とは成立力
天地泉の道は是れ
相附き纏ふ天つ則
魂は御魄一つ道

塞りは止り一斷落
心の極り身の定め
新に進む生魂
功德を成すの立場なり

浮きたる曇明暗の
黃昏時か曉暗か
夜と晝とは定まれり
天地開闢る時の狀

乾坤立たぬ時なれば
造化の初と云ふべきも
鶏子の如溟滓りて
大虚空離れ天地と

其十一

鶏子溟滓る中の狀
三の凝液纏綿りて
上なる太きは天とせむ
下横二つは地と月か

其十二

高皇産靈の神性は
神皇産靈の神性は
津速産靈の玉留は
天御中主大御魂

其十三

天にもあらず地ならず
神と謂ふべき物ならじ
萌牙を含むの時にこそ
化る間の狀是れと知る

天地泉の象あり
上下左右の三角形
天は上にぞ覆ふ形
地は下に載せ泉は垂る

開きて騰る光なり
閉ぢ凝る物の體とぞ成る
砕けつ合ひつ浮き沈み
開閉操縦隱御身

大虚空なるは何もなし
浮くも沈むも定まらず
燃騰る精は神魯岐か
開きつ閉ぢつ相結ぶ

云く岐は精陽性美は實陰質なり岐美二柱は陰陽の元氣にて男性女性の本魂ならむ

其十四

神魯は冠上に覆ふ
火水の結びが風と爲る
天の御柱天を持ち
大虚空中に滿ち渡り

其十五

風の力に體は無し
通ふは交る狀にして
照らして滿つる火の力

浮雲なすの一つ物
時も無ければ方もなし
垂籠むる實は神魯美か
乾坤男女の元氣かな

下に垂れ載せ株と爲る
風は通ひ路疾風なり
國の御柱國を持つ
天地立つの力風

體は通路固まらず
陰陽元氣の交鎖なり
流れて滿つる水の質

御中の主は仲締御魂

其十六

風靜なる其の時は
滿ちて動かぬ其力
大虛空ならず物ならず
天之御柱國御柱

其十七

奔る塞るは風御魂
浮雲漂蕩ふ其の狀は
開きつ閉ぢつ伸び縮み
皇產靈神の幸御魂

其十八

御中の主の隱御身
產靈成所の道として
生魂また足魂
一つの物も其の御氣息

虛空に塞がる力なり
柱とこそは稱ふらめ
虛空と物との通なり
御名稱ふるも宜しこそ

津速玉留是ならむ
神速魂の時にこそ
晴れつ曇りつ往き返る
現れ出づる時ならむ

無所より起り風は鳴所
神魯岐美神顯魂
玉留魂は別御魂

伊裝諾冊神顯身世

右天眞中主神靈德は高皇神皇、津速の三產靈神と立ち其荒魂、和魂、幸魂、奇魂と分れ神魯岐神魯美神は顯御魂にて伊裝諾伊裝冊神は顯身神として神人の元祖と出で給へるを謂ふ者なり

第二節　天地剖判　一

神人顯身成る元祖

其一

漂蕩ふ物の其の中に
葦牙の如萌騰る
成り出る神其名は
次には天之常立神

其二

亦名天之壁立神
大御名天照大御神
撞賢木嚴之御魂天疎向津比賣命　大日靈貴命　天照大日靈命　豐日靈命
泥の中より生ひ初むる
清明らけき物に因り
可美葦牙彥舅神
亦名天之底立神

亦名天角凝魂
天照坐皇大御神

總七御名也、

右可美葦牙彦舅神天之常立二柱神亦獨神成坐而隱御身矣而天照大御神現顯御身給處也、

右天照大御神之大御名伊邪那岐大神因レ洗給左御目一而所成坐神之御名也而嚴之御魂之御名、神功皇后御奉齋之御名也、他御名依二古史成文一奉記、

其三

天の底立壁立の
星の數々現れて
恒星遊星定まるも
或は彗星群小星

其四

別天つ神五柱
天つ日中心此の宇宙
此の御國より仰ぐ神
總ての星國兼ね渡る

御光こそは燃明り
多くの宇宙成りぬらむ
早きも遲きも有りぬべし
無量無邊の國ならむ

無極宇宙の別詞
天つ神坐す其神は
無極宇宙の天つ神は
別天つ神其の義かな

其五

大虛空の神宇宙神
一つなれども差別あり
般若心經說言に
色則是空空即是色

其六

此の天地の天つ神
時に御身をば現して
神魯岐神魯美命には
此の神なるか異なるか

其七

日の大御神月の神
天地鎔造功あり
同神かも異なるか
千早振る世の神代には

二つなれども一つなり
差別無ければ道立たず
色不異空空不異色
義は說けど世は棄てし

高皇產靈神產靈
言語給ふこともあり
天つ詞の太詞
傳へ無ければ知り難し

御祖の高皇產靈神
神田獻れとの詔命
異なる神とは思れず
幽顯出入道ぞある

其八

大虚空中の隠御身
御魂の道は限りなし
神代にもあり人の世も
八意思兼神

其九

隠身神も御心を
此の天地の天つ神
別天つ神五柱
専ならぬを辭別けて

其十

天先づ成りて其の後に
神は國常立神
次に成る神國狭土
此の三柱の神も亦

顯身ありとは思れず
神懸なる其の迹は
神人敬ふ事多し
天つ辭代亦有らむ

現し給へば其の神は
是れ言靈の則にこそ
無極宇宙の神として
此の御傳やありぬらむ

重く濁れる地は成る
亦名國底立神
次に成る神豐斟渟
獨神にて隠御神

此豐斟渟神亦名曰豐雲野神
曰豐國野神曰葉木國野神曰浮
其十一

浮雲なすの其の中に
光ならねば大虚空に
光は日明り照徹る
初めて開く大稜威

其十二

萌騰るとは燃明り
光の力滿立圓にて
可美葦牙彦舅とは
貫き騰る御光炎

其十三

光の御位定りて
天離り照る御光い

經野豐貫神曰豐香節野神
曰豐組野神曰見野神曰豐齧野神曰豐國主神
先づ萌え騰るは光なり
滿ち彌らすの力なし
天つ御魂の高產靈
此れよりぞ成る天つ國

大空中を照り翔る
星とも分れ滿ちぬらむ
其の美麗しきあり狀の
雄々しき陽性稱御名

天常立神と立つ
天底立神ならむ

大虚空中に燦然しき
相照し持つ力あり

其十四

天地泉の型なるは
同じきもあらむ異なるも
光も常立底立と
力の狀は異なるも

其十五

日の大御神御照徹しは
天離るとは限りなき
照すは垂す萬方に
日の御光は大地の

其十六

嚴の御魂を放つとは
萬の物は生り出でて
星の數々其の光
宇宙無極の道は是れ

大虚空彼方此方自から
廣きも狹きも一つかは
差別あるべき道ならむ
光の眞は御中主

天地を持つ御稜威なり
虚空に遠く散る光
儼の御魂を放つ道
眞中の底にも徹りなむ

天地廣く照徹り
活き榮え行き物毎に
其の物々の御魂あり
己が力を現すは

其十七

月の光は日光を
夜母津神とは夜を持つ
青海原の潮を引き
月は根の國底の國

其十八

神は輝く身の光
大地魂月魂
光の力ありてこそ
個々別れては物成らず

其十九

天とは明燃え照渡り
地とは積土持つ身にて
春夏秋冬時々に
是れ天地の光なり

受けて映して夜を照す
御光なるの御名ならむ
夜の露をぞ垂すなり
日と相對ひ夜持つ神

產靈は烝す日の御魂神
力は光の外になし
天地泉は續くなれ
開きつ閉ぢつの光かな

光り輝く力なり
光に對ふ神產靈

月は盡くるの力にて
津速晦冥り神速は

其二十

嚴の御魂の日の神は
隱るゝ御魂に力なし
出づる光を受持つは
月は個々持つ力にて

其廿一

天照す日の大御神
遠心求心開き閉づ
天つ日は立つ御像神
天の壁立つ極みにて

其廿二

祈年祭の太祝詞
其の太前に白くは

津速神速立つの國
朔且光元返り

其二十

大虛空隱身出づる御身
出づる力に御稜威あり
大地積み成す力なり
星は火布くの光なり

其廿一

宇宙眞中の御光は
高天の原を統御す
天地泉は其の御國
底立壁立御名は是れ

其廿二

伊勢天照大御神
見霽します四方の國

天の壁立つ其の極み
青雲靄き白雲の

其廿三

此の太祝詞惟神
神魯岐神魯美命以て
其の御心を窺へば
心詞も及ばざる

其廿四

大虛空御魂は隱御身
光無ければ影は無し
影立つ物は形象なり
天地萬の物皆は

其廿五

天地廣く照徹る
大地に成る物皆は

國の退立つ其の限り
墮伏す限と稱へけり

其廿三

天皇命の稱辭
仕へ奉るの大御典
天地泉の極みにて
畏き道の大稜威

其廿四

出づる御魂は日の光
影を見てこそ物を知れ
形象の本は日の光
光よりこそ現るれ

其廿五

其の明彩は限りなし
國に受け得る力なり

如何に靈異の御光も
草の葉に置く露を見て

其廿六

見えぬ光は御魂にて
出づる光を見てぞ知る
光は光暗は暗
常立底立照徹る

其廿七

天地開闢る其の時に
天つ日先づ成り眞中立ち
大地と月星國は
天つ日は本動くまじ

其廿八

空間時間の定まるは
受け得ぬ國を如何にせむ
此の理を悟るべし
光は御魂の形なり
見えぬ御魂の底姿
善惡のある道は是れ
嚴の御魂と仰がなむ
物に澄むあり濁るあり
常立ち底立ち國分かる
日の御光を受けて成る
時間空間定まれり
天地造化の第一則

漂ふ國に道立たず
天地泉の基立つ
日の大御神月の神

右は顯宗天皇三年春二月、月神著人謂之曰、我祖高皇產靈、有預鎔造天地之功、宜以民地奉我月神云云奉以歌荒樔田云云夏四月、日神著人云云曰以磐余田獻我祖高皇產靈とあるを以てなり

其廿九

空間時間の道なるは
春夏秋冬歲月日
東西南北經緯線
人情風俗自然に別る

其三十

國常立命とは
國底立命とは
國狹土命とは
常立底立道立ちて
造化の神と謂ふは是れ
皇產靈神を御祖とす
事物進化の準則にこそ
晝夜寒暖往來し
地理方物の異同あり
大地國島國魂あり
地體の御魂成り給ふ
地力の限度あるを謂ふ
國幸魂の力なり

國の力の漸々に

現れ出づる奇魂

其卅一

神速須佐之男神はしも
其の御眞名子と現れて
大國主の神と立つ
世に現れし御神德は
曰く御神德の事は御出現の時に述ぶべし

其卅二

豐斟渟神なるは
豐は御魂の力にて
斟は組雲曇り國
渟は野主なり伸び締り

其卅三

積は大地其の根なり
天つ日の裏夜の國
月の清きは玲瓏たり
根の片隅國夜持國

其卅四

見野は水主水の精
月水を引き精垂れて
葉木國なるは端小國
浮經野豐賣神なるは

其卅五

浮經野なるは浮伏しつ
香節は齧し泉つ神
暗國なれば明からず
鳥虫獸魚共の

其卅六

飡泉之竈は國の情狀
物を撰ばず摭食む

暗國なれど光あり
裏に潛むの底力

其卅四

見野は水主水の精
月水を引き精垂れて
葉木國なるは端小國
浮經野豐賣神なるは

其卅五

浮經野なるは浮伏しつ
香節は齧し泉つ神
暗國なれば明からず
鳥虫獸魚共の

其卅六

飡泉之竈は國の情狀
物を撰ばず摭食む

大地海原水の國
清きは月の光なり
月は端國小國なり
夜母津國邊の神心

豐賣養物浮き沈み
食物經喰ひ齧り食ひ
口に探りて食ふの狀
狀態見てぞ知らるるなり

經廻り食ふの醜女かな
狀を見て知る飡泉なり

醜女取り食ふ蒲萄子
蛇蜂室屋蜈蚣居る

其卅七

泉國心は食ふに在り
卑賤しき人の心其れ
食ふは生命の根本なり
津速産靈の神は是れ

其卅八

高きは高皇産靈神
分けて津速産靈神
天照日之大御神
天つ大神國つ神

其卅九

隱身大虛空現れて
大地月星連りて

筍子見れば止り噉む
人の身ならば乞丐か

豐組豐賈國御魂
食ふより外に思ひ無し
根の國の名は産靈なり
幼兒心見てぞ知る

成すは神皇産靈神
隱身天之御中主神
嚴之御魂と立ち給ふ
顯身成さぬ神は無し

天つ御光滿ち渡り
一つの宇宙無窮に

顯世幽世道立ちて
日の本國を玉牆の

其四十

嚴之御魂は出御魂
是れ幸魂奇魂
光は物の生命なり
天には開き地に閉ぢ

其四十一

天は明燃え光なり
日出でて明く幾日あり
幾日は時にて時間なり
光隱れて日所は無し

其四十二

日の出入ある其の道は
曇は暗し月の影

天皇は無窮に
內御國と御世統御す

出でて御照す天地泉
開きつ閉ぢつ靈異なり
生命は活血散る力
神人萬の物榮ゆ

光無ければ日所は無し
幾日ありてぞ幾所ある
幾所は方にて是れ空間
御身を隱して日の出入

光に纏ふ曇なり
日月の出入晝と夜

晝は日明る影にして
日の乾陽の眞光力

其四十三

夜母津國とは持夜神
見野は水主水の眞
月の持たる其の光
夜水の露布き潤せり

其四十四

天地泉の斯道は
頭は天魂神知らす
胸は身根にて地の道
腹は氣滿ちて尻締る

其四十五

一二三の歌に人身の
人と云ふ名は日と月の
夜は暗なる形なり
月は坤陰其の精氣

其四十三

月の御魂は見野神
日の御光を持つの水
此の大地を照してぞ
日月の御蔭相纏ふ

其四十四

人の身にこそ現るれ
上に位し身を統る
身を養ふは胸に在り
玉留魂は子身ぞ成る

其四十五

生るゝ道は備れり
光を受けて生死あり

天は父なり地は母
彌榮え行く人の道

第三節　大地性徳

其一

國地稚く成る神は
宇比地は浮き泥陽の精
浮きたる泥は國の肉
海も陸も混沌し

其二

地質漸やく固まりて
角機活機二柱
動植二性の相依るは
食ふべき物あり活る道

其三

大地固まる初めには
夫婦相依て子は生る
產日の光是れならむ

其一

宇比地須比智の男女神
須比智は沙土陰の質
陰性沙土は地の骨
浮きつ沈みつ泥の海

其二

物の初めぞ現るゝ
動植二物の御魂神
桑と蠶を見てぞ知る
動植相資る造化なり

其三

成りつ崩れつ定まらじ

成り調うて大斗能地
成る國地は大富道
大斗能大富事同じ

其四

伊弉諾伊弉冊二神
伊邪那は誘和岐美男女
此の道國に具備りて
人の生るゝ道も此れ

其五

神代七代の其の中に
御身を隱して鎭まりぬ
五代の神は時々に
伊邪那岐伊邪那美二柱

其六

神代七代の道問はゞ
大斗乃辨とて男女神
大富邊の神國の富
神人住むべき八尋殿

神性人格天つ則
國常立の御魂神
後に顯身現れむ
先づ母の身に備れり

其七

初め二代は獨御身
五代は男女の神偶ぶ
變る御魂の姿なり
青人草の本御魂

人の身を見て悟るべし
初は姿無かりけり
ある其の姿御魂なり
身の姿とぞ現るゝ

其八

人の見る目は形なり
神代七代は神語り
五代の末の那岐那美は
隱りませども道ぞある
大地中の御魂神
御魂の分ちあればこそ

顯身なりとは思ほえず
御魂の力定りて
人にて云はゞ胎內身
後に顯身成りぬらむ
國つ神々其の本は
國魂神の出づならむ

第三章　皇祖二神世界開闢

第一節　皇天賜勅二神

其一

天つ神より勅命
漂在へる國修固成せと
天つ神とは何の神
其の御名初に無けれども

其二

天の瓊戈は御魂戈
火凝なるは天つ日の
角凝魂は突き貫きて
如何に廣きの大虚も

其三

伊弉諾冊の二神
伊弉諾伊弉冊二神
天の瓊戈を賜ひけり
神魯岐神魯美命なり
禊ぎ祓ひの時に在り

戈とは火凝御稜威かな
角凝魂の力なり
嚴の戈とぞ爲りにける
照徹すの光なり

何れに坐せし神ならむ
天つ神にや國つ神
顯身として現れて
天降りての國作り

其四

人は日月なり一十の道
身を受け生る人の本
人の道をし盡さずば
世の中開く二柱

其五

天なる神魯岐神魯美は
世の祖と立つ大御稜威
國常立は本御魂
神人國土群品を生み

其六

一二三の十言天つ神
五代の末の其の神の
天に召されて勅命受け
生れし國を作るにや

日月の御魂大地の
神の御末の身とは是れ
一人と成らぬ道にこそ
御裔の神人世を固む

御魂の道の御宣にや
國作り成す光ここそ
顯身成すは二神
幽世顯世出入す

指折り數へ十條の

御教こそ思はるれ
妹妖の神の事の迹
泉路の亂れ測られず

第二節　自凝島成

其一

天の浮橋八重雲に
青海原の八潮路を
引き上げ給ふ戈の末
自からにぞ島と成る

其二

自凝島に瓊戈立て
天の御柱見立てまし
潮凝り成るの自凝島
天の御柱天つ則

其三

立ちて瓊戈を指し下し
許袁呂許袁呂に畫鳴し
垂落る潮は凝り積り
之を自凝島と云ふ

國の御中の柱とす
八尋殿成し住み給ふ
瓊戈を柱八尋殿
國の御柱國の道

是れ神の道人の道
此の道ならぬは更に無し
此れは奇の道ならむ

見立つる者は心なり
青海原の國なれば
八尋殿とは世の中の
天つ御則を柱とし

其四

自凝島の道はしも
男女相合ふの中よりぞ
國の初も人の身も
道なき時に道を立つ

第三節　二神結婚

其一

伊邪那岐神は問ひ給ふ
伊邪那美神は答へます
又問ふ吾が身は餘あり
吾れは國土生む心

家なき家の八尋殿
共に住むとは立つ心
廣きを家の心にや
國を作るの道は是れ

人の身にこそ現れ
自から凝る子の身哉
天つ則あり世に出る
伊弉諾册は世の御祖

汝が身は如何に成りけるか
吾が身は成りて合はぬあり
合ざる汝が身に合せなむ
汝が心には如何にぞや

身の成型を問ひ給ひ
實に奥深き御心か
男神先問ふ天つ道
一言一業開くにも

其三

伊邪那美神御答へて
然らば天の御柱を
廻り逢ふ時面合せ
汝は右より廻り逢へ

其四

如此云ひ約り廻りまし
伊邪那美神先唱ふ
伊邪那岐神後和ふ
各自云ひ竟へ給ひしが

其の御心を語らふは
伊弉諾冊の道開き
女神の答へ地の則
惟神なる道ぞある

其三

然善からむと白しける
吾れと汝と行き廻り
美度の目合爲してまし
吾れは左を廻りなむ

御面を合せ給ふ時
妍哉可愛少男歟と
妍哉可愛少女歟と
男神は悦び給はざり

女言如何に先立つぞ
其の術知らず時にしも
其の首尾を搖かせり
先づ生み給ふ御子蛭子

其五

顯身の神世に無きを
此の世の中の御祖神
如何に遠きの神代かな
鶺鴒は教鳥

吾れは男に在り先づ唱はめ
然れど久美度に興す時
鶺鴒なも飛び來り
其の狀を見て道を知り

其六

此の問答見てぞ知る
男女の習ひも亦無きを
初めて開く時の道
心開けて術知らず

其七

蛭子の神は脚立たず
脚立たざるは獨立の
蛭子は姿の名とぞ知る
淡島泡沫の島にして

葦船に入れ放ち棄つ
力なき身の神と知る
骨なき狀の事ならむ
人の身ならば流産か

其八

女は子を成す重き道
心も身をも静かにし
警戒る道あるを聞く
妹の神には御心を

其九

二柱神議りまし
天に上りて具にぞ
天つ御神は太兆に
女の言の先立ちて

其十

還り降りて改めて
男の神先は唱り給ふ
後に妹神和りませり
如此言ひ竟へて御合ひまし

妊娠と知らば安らかに
煩労無きが胎教と
妖の神悦び給はぬを
傷めしことや有りぬらむ

御子不良はざる其の由を
奏して命を請ひ給ふ
卜相教へ給ひける
不良はざりけり改めよ

天の御柱行き廻り
妍哉可愛少女歟と
妍哉可愛少男歟と
淡路の島を胞とぞ爲す

其十一

世の祖と立つ二柱
女神の言の先立つは
不良はぬことゝ思へども
天つ御則の裏表

其十二

神ながらなる道はたゞ
事なき時に未來より
大虚御魂は隱り御身
天つ御神の太兆は

其十三

兆とは御卜の隨にして
御心を知るの御卜にて
卜相ふことは心象を
裏なる心隱御身

初めて夫婦の契りなり
眞心餘る爲ならむ
男神忍ぶも誠こそ
奥深き道ありやせむ

事に觸れての教なり
教へ警むる事ぞ無き
太兆にてぞ伺はる
其の御心の御卜型

奇を仰ぐ心なり
太兆見てぞ裏を知る
表に出す所作の方
表の象これ光

其十四

天つ大神太兆は
其は何神の御心か
卜相ふなるは裏合せ
大虚空奥の隠御身

其十五

何も無きなる大虚空の
産霊の神は表にて
裏とは心隠御身
裏底心奥深し

右は佛教首楞嚴經三身壽量無邊の所說相似たる者あり文殊白レ佛言、我等從レ昔聞二如來說法一、如來何佛聞二此說法一、佛告二文殊一言、云云承二大毘盧遮那說法一、文殊重白レ佛言、云云何者是也、世尊復言、云云承二妙覺地毘盧遮那說法一、文殊重白レ佛言、妙覺地毘盧遮那說法、世尊復言、妙覺地毘盧遮那承二無始無終一、一心一念本佛說法、文殊重白レ佛言、無始無終一心一念佛從二何佛一承二說法一、世尊復

是れ何神に問ひ給ふ
傳へ無ければ知り難し
天つ御神の裏心
天御中主御心か

御魂心の裏表
御中の主は裏にこそ
表に立つが産霊かな
一心無邊是れなるか

言、無始無終本佛承二無心一無念本佛說法、世尊復言、無心無念本佛上更無二佛陀一、無二前佛一無二後佛一、

釋義評說

毘盧遮那遍照明　佛身光明智光明
無始無終一心念　密經大日法界明

又

妙覺一心無二入出一
產靈烝日大圓日　發光開閉天眞實

表裏隱徵無念心　發

曰く神道に四魂の別あり荒魂和魂幸魂奇魂あり差等的に觀察すれば伊弉册神は荒魂に位し毘盧遮那に相當し伊弉諾神は和魂に位し大毘盧遮那に相當す神皇產靈神は幸魂に位し妙覺地毘盧遮那に相當し高皇產靈神は奇魂に位し無始無終一心一念本佛に相當す天之御中主神は四魂を總有し無心無念本佛に相當し斯佛の上に更に佛陀なし前佛なし後佛なしとは能く神道の名德に符合するが如し佛敎は月光本位の陰性にて神道は陰陽圓滿なる陽主なりとす

第四節　生二大八洲一

其一

生み給ふ御子大倭
次に生み成す伊豫二名
次に筑紫の洲を生む
次に隱岐佐渡壹岐津島

其二

大八洲の名異同あり
隱岐と佐渡とは雙生洲
處々の子島をば
或は傳ふる六つの島

其三

六つの島とは吉備兒島
知詞の島また兩兒島
越州大洲吉備子洲
越洲大洲吉備子洲
壹岐津島をば加へざり
潮沫凝り成る島と爲す
八洲の中の名も加ふ

其四

小豆島また日女島や
八洲を生みて還り路
大倭島根の片小國
八個の洲とは後の世の
妹妖の神の生み成すは
漂ふ國の青海原
越の洲とは海の外
今は萬の國ありて

其五

國土を生む御傳へを
是れ國魂の神を生む
伊弉諾伊弉冊二柱
生國玉と足國は

其六

國常立は隱御身
隱身なるは國土を
顯身ならでは國業の
人の定めも有りぬらむ
國の八十國島も八十
初は國も島もなし
大洲の名は大陸地
大八洲とは大彌洲
世の人如何に思ふらむ
固より國に御魂あり
神人を生む顯御身
國神を生む御稜威なり
諾冊神は顯御身
無窮に持つ力なり
活動を爲す力なし

顯身神は千萬の

其七

顯身神は神姿
國翔りつゝ御心に
何一つなき海原に
涅土沙土を卷き立てゝ

其八

生みは浮く身の心なり
初見えねど漸々に
人も其れなり物も其れ
人の姿を見ても知る

其九

隱身なるは天地の
顯身なるは天つ神
物玉身魂の道あるは
物榮え行く光なり

天地中を天翔り
思へば國形生り出づる
瓊戈の力風起り
散りつ寄りつの國固め

無き身を現す初形
浮き現るゝ御魂なり
產土神の御名は其れ
父母の身に御魂入る

開闢る時の御魂なり
時に授くる力なり
體力二つの別なり

人の身もまた道ありて

其十

生死の道は生理にて
生理は其身に定りて
心理の力は心にて
生理は器物と謂つ可し

其十一

生理は尊卑無けれども
生理と心理は離れ得ず
心理は岐の神生理は美
此の理を覺り得ば

其十二

我が家の道は隔なし
天に昇れば天の神
顯幽生死神々の

生理心理の別あり

開くと閉づは心理なり
如何なる心も及ばざり
罪も功も現るゝ
牛は牛なり馬は馬

心理に位定まれり
生理は體なり住所なり
天地陰陽是れならむ
宇宙の中は我が家なり

天眞靈光萬象神
地に住居れば生れ鄉
御蔭の中の我が身なり

光の道を知らざれば

其十三

大虛空滿つる大御魂
天つ光は照徹り
日本帝國畏くも
死後は幽冥主宰神

其十四

天地陰陽の此の道は
天に坐します天つ祖
此の大地に天降る
日月の道は父と母

其十五

夫婦の道立ち世の中の
道には本あり末ありて
皇君の位は岐美の道

往くも返るも暗路かな

天地泉の此の宇宙
萬物生々無量なり
天壤無窮の御國體
神國神孫人の道

其十四

產靈の神の天つ法
神魯岐神魯美二柱
伊弉諾伊弉册二柱
日の大御神統御皇

榮え行く道定まれり
高きも卑きも動かざり
合せて國の高御座

國の中なる萬民を

第五節　生二萬神萬物一

大御寶と詔り給ふ

其一

大八洲國生み竟へて
萬の物も悉く
國多ければ物多し
上つ國あり下つ國

其二

上つ國とは皇國
下つ國とは底邊なる
底つ邊までも皇神の
國魂ありて千萬の

第六節　五元神出現

其一

伊邪那岐神詔り給ふ

生みます神は八百萬
生み給ひけり世の御祖
物多ければ世は久し
漂ふ國の國作り

尊き神の本つ國
天雲遠き末の國
御稜威耀き渡りなむ
物こそ生ふれ神の道

吾が所生る國朝霧滿つ

吹き撥はせる御氣に
志那都比古神比賣神
風天地に滿ち渡り

其　二

天つ日暑き御光と
相依り起る風なれば
萬の物にことごとく
大虛空ひろき世の中は

其　三

天地未だ成らぬ時
其の狀こそは風なれど
伊吹の風は力なり
五元の神の成ますは

其　四

天つ日と火と異なるは
風の神こそ成りませれ
天之御柱國御柱
天地を持つ桂神

其　二

月の光の冷え凍る
風は通路氣吹きなり
風ありてこそ息通へ
風の力に活き動く

浮雲の如く漂蕩へる
其れは風吹く元御魂
顯身神ぞ現るゝ
神として立つ力なり

其　四

大虛空滿つと物の內

天つ光は靈明にて
火は其れならで物に依る
日の御光は天地に

其　五

亦月と水其の道も
月は虛空照る光にて
大海原は水なれど
乾坤日月山海は

其　六

伊弉冊神は火產靈の
火は身の內の熱き息
風は外より吹き拂ひ
內より出でて身を燒くは

其　七

火は火を消すの力あり
開くも閉づも御自から
物なき時は燃え立たず
伊照徹らす嚴御魂

日と火と異る型にこそ
水は流れて浮き沈み
天地相依る靈異潮
惟神なる大產靈

神を生みてぞ身を燒る
現れ出づれば物を燒く
火は內よりぞ燒え起る
己を破る火の力

起る消ゆるは己が隨

起れば雷怒り持ち
燃えつ消えつの力こそ
天つ御光照徹り

其八

御蕃登燒かれて石隱り
多具理に成れる其の神は
金の御魂の神にして
火の神ありて金の神

其九

金は火に依り火は風の
風は男神の氣吹きにて
女神の心惱ますは
火に勝つ者は水と土

其十

火に身を燒ける女神には
八種雷長るべし
殺活自在の稜威なれ
火は陰に在り明滅す

其十一

悶熱ひ懊惱む其の時に
金山毘古毘賣二柱
枯れ惱ませる堅根神
世に現るゝ道は是れ

其十二

力ありてぞ起るなり
火と金是れは女神の身
火の恐るべき爲にこそ
金は負けてぞ功成る

其十三

男神に見なと請ひ給ふ
男神怪み見給へば
吾が妹の命は上つ國
許き仇すと思ほせる

其十一

女神心のつゝしみは
御蕃登燒かれし御姿を
妹脊の契り棄つまじと
たとへ火の中水の中

其十二

石隱ります女神には
思ほしめさく上つ國に
如此詔り給ひ返りまし
水の神また土の神

其十三

水の神御名彌都波能賣
見阿波多志と白しつゝ
吾は下國と石隱り
女神の御心如何ならむ

其十一

男神を慕ふ誠なり
男神に見られ堪ふべきか
思ふは人の誠にて
女心はそれ一つ

其十二

泉津平坂に到りまし
心惡しき子を生み置けり
更に御子ぞ生み給ふ
天の吉葛また川菜

其十三

土の神御名埴安毘賣

四種の物を生み給ひ
水の神には瓠持ち
身より出でたる火神を

其十四

五元の神の神性は
火は男性にて水女性
天つ御魂の元問はゞ
土は姫神成りますが

其十五

風神成り火は生る
悶熱懊惱み病臥し
枯れ惱みたる時なれば
堅根の神は生れけむ

其十六

火の力なる和魂
火鎭めの道教へます
土の神には川菜持て
鎭むる物も身より出づ

風と金とは男女の神
土は火を持ち水を持つ
津速産靈神ならむ
埴土根沙土根男女性

風なき所火は燃えず
時に成ります金神
忍び克たむの御心は
金の功は火にぞ在る

暖り持ち照り明し

荒魂をば惡しき子と
水と土とは相依りて
吉葛川菜鎭火の

其十七

御尿はしも御身の水
水にも土にも自から
遺す御敎時に觸れ
顯身成すの其の神は

其十八

神の御道は事の迹
相語り繼ぎ後の世に
鎭火祭の神事は
天都詞の太詞

第七節　火土神德生保食神

其一

鎭めむとする御祖神
火を鎭むるの力あり
御敎こそは尊けれ

御尿は御身の土にして
具る則を現して
事に應ずる道開き
其の業幸ふ御魂神

神代ながらの其の儘を
御蔭傳ふる敎なり
皇朝廷の重き儀式
事の根元を傳へけり

火の神御合ふ土の神
此の御子豐受毘賣神は
其の幸魂木の御祖
合せて屋船の神と云ふ

其　二

豐受毘賣の神はしも
世の中に住む人の身は
伊勢二所皇太神
鎭りますの傳記こそ

第八節　石隱神避

其　一

伊邪那岐神詔り給ふ
子の一木に易へつるか
泣き給ふ時御涙に
伊邪那美神は比婆山に
生み給ふ神稚產靈
宇迦の御魂の神に坐す
草の御祖の二柱
是れ御殿の守り神

衣食住居の本御魂
一日も漏れぬ御蔭なり
內宮外宮並ばして
天の下人齋ひけれ

愛しき我が那邇妹かも
御枕方に匍匐御足方に
成りまず神は波澤女
葬し奉るの傳あり

愛しき妹神避りて
泣き悲むの御心は
妹神思ふは國思ひ
道心情熱天地の

其　二

悲み給ふ其の誠
泣澤女の神現るは
喜怒哀樂の其の心
漂ふ國を作り成す

其　三

石隱りとは奧深く
また神避りは此の國を
火鎭祭りの祝詞言
御死り給へる者ならば

其　四

枕方足方匍匐ひて
妹妹の眞心至りなり
情と道と二つにや
造化の道は外になし

大虛空高く響きけむ
世の道立つの一つなり
自然なる理は
世の祖神の道にこそ

閉ぢ籠りまず事ならむ
遠く去りしの傳へかな
顯身坐すと思はるゝ
再び還る道あらじ

其五

妖の大神の御悲み
また比婆山の御葬は
御傳言のあやまりか
千早振る世の神事は

其六

古事記の端ぶみに
神代の神は御死らず
此れぞ神代の正事の
但伊邪那美の神性は

其七

伊邪那岐神は日の光
月に戻盈ある者は
身に生死はあらずとも
葬し奉るの比婆の山

世の常事とは思はれず
顯身坐すの道ならじ
何れ正しき事ならむ
誰れしの人か知り得べき

幽顯出入説かれたる
顯身のまゝ出つ入つ
姿を寫す者と知る
生死道の型あらむ

伊邪那美神は月の色
生死道と謂ふべきか
影を隱すの道あらむ
深き謂れの有るを知る

第九節　斬二迦具土神一

其一

伊邪那岐神御佩かせる
御子迦具土の神を斬り
其の一段に大雷
其の一段に高龗

其二

御佩刀の血は激越りて
御子磐筒之男磐筒之女
又甕速日熯速日は
此の時の血激越りて

其三

其の斬り給ふ御刀は
又迦具土の神の身は
左右の手足にも

十拳劒を抜き給ひ
三段にこそは爲し給へ
其の一段に大山祇
三柱の神成りませり

磐裂根裂の神成りぬ
經津主神の御祖なり
建雷神の御祖なり
石礫樹草に火を含む

天之尾羽張伊都尾羽張
頭に胸に腹に陰門
山祇の神成りませり

大雷の神の身は

其四

大山祇の神の御名
野槌の神と相共に
天之狹土と國狹土
天と國との闇戸神

其五

大山祇は山の神
水は流れて海に入り
水源混々晝夜なく
八種の雷八山祇

第十節　大神往還泉國

其一

神避る妹を追ひ給ひ
相見て語り給はくは

八種の雷泉津神

其四

大水上の神と云ふ
山野に依りて生む神は
天之狹霧と國狹霧
大戸惑子惑女神

其五

大水上は水源地
地底廻り山に出づ
萬の物ぞ榮えける
八大龍王是れなるか

其一

泉津國にぞ徃でましぬ
汝を悲み吾れは來つ
吾れと汝と作りし國
吾が妖來ますぞ遲かりき

其二

然れども吾が那勢入來ます
泉つ神にも議りてむ
殿の內にぞ還り入り
湯津爪櫛の一つ火を

其三

頭に成り居る大雷
腹に成り居る黑雷
左の手に居る若雷
左の足には鳴雷

其四

殿の內なる雷は
父大神の御怒りに
成し竟へざれば還りませ
吾れはや泉つ戶喫せり

其一

畏く思ふ還りなむ
族や吾れを見給ひそ
久しく出でず待ち兼ねつ
燭して見れば蛆たかる

其二

胸に成り居る火雷
陰に成り居る拆雷
右の手に居る土雷
右の足には伏雷

其三

迦具土神の分け御魂
觸れて成る神諸はじ

母神の身に副ひ居れば
還り給はむ御心も

其五

天地泉の道ありて
往きては還る道あらじ
人の食ひ物見ても知る
善惡共に定めあり

其六

見畏みてぞ詔り給ふ
汚穢き國かいな醜め
妹の神には恥ぢ恨み
吾が心をや汝見ん

其七

妹の大神も之を聞き
慙づる御心同情心

親と子の道如何ならむ
遂ぐべき道や無かるらむ

汚穢き根の國底の國
戸喫ひを惜む謂れあり
腹に入りては返らじを
世を進ますの天つ則

吾れ不意も此所に來つ
逃げ還ります其の時に
何故て要言を聞かざるか
汝の心吾れも見つ

御心にしも慙ぢ給ふ
恨みの言を宣と見る

上つ御國と下つ國
心情は知れど道ありて

其八

出で返ります其の時に
族や離れん吾れ負けじ
此の時に成る其の神は
御心定め逸速し

其九

掃ひ給へば時に成る
亦此の神の御名はしも
泉つ心の事解けて
吉事凶事身に受けて

其十

唾は突吐き建速にて
津速產靈の神の名を

同じからざる心情あり
善惡棄つる道はなし

默し歸らず盟びます
詔り給ひてぞ唾せり
速玉之男の神と云ふ
其の幸御魂現るか

豫母津事解之男神
大事忍男神と云ふ
大事負ふの御魂神
大事に立つ魂鎭

速玉之男神成れり
神速魂神と云ふ

津速産霊は御虚空神
固より同じ御魂神

其十一

妹神醜女を遣はして
十拳劒を抜き給ひ
黒御髪は蒲葡子
生るを醜女は噉み了り

其十二

最後にしも妹の神
此の時大神平坂の
實を三個採りて待撃す
桃悪鬼を避ぐこと

其十三

大神桃に詔り給ふ
青人草の落苦瀬にて

泉に下りて速玉か
時に随ふ神と知る

妖の神の身を追はしむる
後手揮きつゝ逃げ給ふ
湯津爪櫛は筍子に
了れば更も追ひ來る

身自にぞ追ひ來ます
桃の樹陰に隠れまし
八雷等は逃げ返る
此の時よりと云ひ傳ふ

吾れを助けし其の心
惚苦む時に助けてよ

大加牟豆美命とぞ
大神之實の稱名は

其十四

樹にも草にも御魂あり
蒲葡子筍子も
功の狀は異なれど
皆大神の大稜威

第十一節　生死天則

其一

坂路を塞る千引き磐石
事戸を度し給ひては
妹神白す人草を
妖の大神は詔り給ふ

其二

此より莫來と詔り給ひ
桃に其の名を賜ひける
靈實と詔る御心か

藥ともなり毒にも
醜女を避ぐ功あり
時のまに〳〵起る道
現れ出づる道ならむ

中に置きてぞ對立し
妹妖の契り玆に絶つ
一日千頭殺しなむ
千五百の産屋吾れ立てむ

其の御杖をぞ投げ棄てつ

死ぬるは千人生るゝは
天數は三つ地は二つ
男神は上に女神下

其三

族としての悲みも
如此詔る時に妹の神
吾れは汝と國を生む
吾れ此の國に留まらむ

其四

伊邪那美神是れよりぞ
御杖より成る久那斗神
豫美坂所塞石神は
八衢比古比賣二柱

第十二節　禊祓

其一

千五百人なる道立てり
覆ふと載するの道は是れ
各自定むる心なり

其二

思哀びし事も吾れ怯し
豫母津道守に白さしむ
如何でか更に欲せむや
大神善めて散去ます

其三

泉津大神と稱しける
衝立來名戸之祖神
是れ塞坐豫美戸大神
此の三柱は障の神

大神既に還りまし
しこめ汚穢き國にしも
滌ぎてましと粟戸また
然れど二門は潮急く

其二

筑紫日向の阿波岐原に
先づ投げ棄つる御帶より
御帶は長し長路なり
活き働くの力なく

其三

御衣を投げ棄て成る神は
身に附き纏ふ御衣なり
御褌を棄て成る神は
褌の口は開き廣し

其四

悔ひ給はくは吾が身はも
到りてありき身の穢れ
速吸名門を行き見ます
御心にしも適はざり

禊ぎ祓ひを爲し給ふ
道長乳歯神成れり
這ひ纏はるの心かな
御心鈍き神ならむ

是れ煩之宇斯能神
煩ひ惱む神ならむ
是れ飽咋之宇斯能神
飽食暖衣放慢神

左の御手の手纏より
左は陽氣奥深し
疎るは迂遠粗漏なり
邊疎神は右に成る

其五

奥津那藝佐毘古其の神は
心の變る神ならむ
此神は奥陽性で
心變りのする神は

其六

奥津甲斐辨羅は陽の神
甲斐辨羅の名は陰日平
心に裏と表とあり
御身に著けたる物に因り

其七

奥疎神成り出づる
是れ男神とぞ知られける
情誼の薄き神ならむ
女性多情の神ならむ

其五

波瀲は潮の滿涸あり
嘘も誠も定まらじ
邊津那藝佐毘古陰性か
誠心はなかるらむ

邊津甲斐辨羅は陰の神
日平は表陰は裏
波瀲の滿涸と相似たり
九柱の神は成る

九柱の神成るは
穢れ物より惡しき神
身の穢れ物投げ棄てゝ
汚穢を拂ふ御心は

其八

根の國底の夜母津國
下つ國なる狀は其れ
印度の國は月種國
神代ながらの習ひかな

其九

大神與言爲し給ふ
初めて潛ぐ中つ瀨に
穢き繁き國到る時
此の神こそは天照す

其十

御身に著けたる穢れ物
成るを見て知る天つ則
先づは心ぞ新なる
惟神なる道にこそ

蛆斗呂々久の汚穢國
日の本國は上つ國
佛の敎乞丐は
其の世を厭ふも宜しこそ

上つ瀨急し下弱し
大禍津日神成（ぬ）
汚垢に因りて成れる神
日の大神の荒御魂

日の大神の荒御魂
禍とは矯る義なり
民を治むる國の法
大御中主伸び締り

其十一

其の禍をしも直さむと
伊豆能賣神次に成る
御鼻を洗ひ成りますは
四柱の神異名あり

其十二

神直日神は天照す
秋津日神は男女御魂
速佐須良比賣神はしも
秋津日佐須良比賣神は

其十三

大禍津日とは如何にぞや
矯めずば禍を如何にせむ
惡罪を懲すの道ぞある
締るは卽て曲るなり

其十一

大直日神成り給ふ
速秋津日神は是れ
速佐須良姫神と云ふ
是れ祓戸の神にます

其十二

日の大神の和御魂
秋津日子比賣水戸神
力を合す須佐之男神
月の御魂にこそあらめ

其十三

祓戸四柱此の神は
大祓なる神事は
暑さ積れば夏祓ひ
極まる時は改まる

其十四

水底沈み成る神は
水中に濳き吹き成すは
上に浮びて濯ぐとき
六柱の神成りまして

其十五

身の穢れ去り御心の
祓戸神の現れは
禊ぎ祓ひの神事は
神魯岐神魯美命勅

其十六

春夏秋冬御魂神
夏の終と冬の末
寒さ極り冬祓ひ
年々新に進む道

底津綿津見底筒之男
中津綿津見中筒之男
上津綿津見上筒之男
大綿津見神は是れ

御曇り共に晴れにけむ
世の中晴るゝ道と知る
天つ御神の道にして
祓ひの祝詞傳はれり

左の御目に成り給ふ
右の御目には月夜見と
天つ日の神一柱
月夜見神は二柱

其十七

此の大地は日と月の
此の國作る皇御祖
天つ御魂も國魂も
時に隨ひ世に連れて

其十八

天地成らぬ大虚空は
天地泉の元御魂
姿無ければ言問はず
時に顯身現はすは

其十九

天照す日の大御神
須佐之男神共に成る
嚴の御魂と照徹る
光と暗の二面

其二十

中に立ちたる中つ國
顯身を成す國の道
萬の物も人神も
日月の御魂現はれむ

其二一

神ながらなる隱御身
亦隱御身姿なし
御魂の心現れず
尊き神も卑き身も

顯世道の尊きは
神ながらなる神の道
知るは神なり言靈の
天つ祝詞の太詞

其二二

禊ぎ祓ひの道立ちて
思へば日の道月の道
天地泉の道分かれ
世を統御す道として

其廿一

上の十まり二柱
皇御祖神神功は
大八洲國生み成して
萬神々よろづ物

其廿二

見えぬ心を現はせり
天地もなき古を
幸はふ國の光かな
口口傳ふ神語り

其廿三

御身御心ぞ晴れ渡る
現れ出づる時ならむ
生死吉凶定まりぬ
畏き御身や成りぬらむ

其廿四

御身を滌ぎて生れましぬ
此所に至りて滿ち給ふ
國の八十國島の八十
日の神月の神生れぬ

日月の神の生れますは
日月の御國は天地の
隱身なれば姿なし
明つ御神と世を統御す

其廿三

天下なる主神を
そも大地は天つ日の
天より降る皇御祖
日月の神の生れますは

其廿四

日月の神の生れましは
御傳へ二つに分れたり
惟神なる道次第
二柱神國作り

其廿五

是れは顯身神に坐す
開闢くる時に定れり
言語道も開けざる
天皇の天御祖

皇御祖神思せり
御光受くる御國なり
天と地との道ぞある
惟神なる道にこそ

古事記と日本紀
取るも取らぬも人心
古事記ぞ事實にや
生死の道事繁多し

生くる死ぬるの道なるは
二柱神相語り
事定まりて道立ちて
天地泉の道にこそ

第三章　宇宙統御大憲章

第一節　統天勅宣

其一

伊邪那岐大神歡喜ばし
御子生み生みて生の終
其れ天照す大御神
天地中に照り徹り

其二

吾御子多に有りぬれど
日月の本に在ると知る
上下國を分け造る
統御主神現るは
古事記の傳へ是れ

詔り給ひける吾れはしも
三柱貴の御子得たり
生れましながら御光は
明彩しくこそ坐しにけれ

如此靈異の御子はなし

此の御子いかで此の國に
其の御頸珠玉の緒を
高天原を知らせとて

其三

天地相去る遠からず
天照します大御神
天の御柱天つ風
御光の息滿ち渡り

其四

顯身の世は幽世の
天つ日光り天地に
顯身成せば光滿ち
高天の原を知すとは

其五

天つ日天の常立は

留むべきかと詔り給ひ
琅々然〳〵にゆらかして
大御神にぞ賜ひける

天の御柱あげ奉る
高天の原を知しめす
風は息なり力なり
天御虛空の力なり

御魂ながらの姿なり
照り徹らして限りなし
卽て天照る大御神
本つ御魂に入り給ふ

隱御身なる御魂神
神と立つ身の顯身は
顯身隱れて天歸り
古事記の叙文の

其六

月夜見の神御光彩は
月の御光夜を照す
日の御光は世を伸し
伸びつ縮みて萬物

其七

月は根の國底の國
大地常立月底立
見野は水主地の面
乾坤陰陽は相對ひ

其八

月の光は二面

天照します大御神
隱身出でて顯御身
幽顯出入是れならむ

日の神に亞ぎ明麗しく
日と相偶ぶ晝と夜
月の光は物を締む
是れ世の中の生命なり

大地共に日を仰ぐ
豐斟渟神見野神
露とも爲りて物の乳
天地泉の道關聯く

盈つると昃る表裏

二面なれど道一つ
青海原の潮満ち干
大地は上月は下

其九

健速須佐之男命には
其の御所命の國知らず
哭き伊佐知てぞ恚みき
枯山なして泣き枯し

其十

伊佐知は勇散り震動す
勇み悍くて安忍まし
青山枯るゝは山崩れ
人草傷害ふ其の狀は

其十一

こゝに大神詔り給ふ

彼方此方を照り分くる
水主の神の力なり
分れてあれど一つ國

潮の八百重を事依さす
御鬚心前至るまで
其の泣く狀は青山を
海は悉なき乾しき

天變地異を起すなり
人草多く夭折へり
海は變りて陵と成る
病飢饉や世の亂れ

所命せる國を治ずして

哭きいさちるは何事ぞ
母の坐す國聖洲國
大神怒り詔り給ふ

其十二

須佐之男神請ひ白す
請ひ白してぞ罷りなむ
天地泉を統御しらす
皇大御神に請て後

第二節　皇祖大神還レ天

其一

こゝに伊邪那岐大御神
天に昇りて報命
淡海の多賀また淡路洲
日の少宮は天つ日の

其二

御答へ白す吾が心
罷らむと思ふ故に泣く
此に勿住そ夜見に往け
天照す日の大御神に
大神宜べと勅り給ふ
道の尊き事ぞ知る
事定まるは天つ則

神功既に畢へ給ひ
日の少宮に留ります
幽宮あり鎭まりぬ
中に設けの新宮か

大神天に通はむと
天橋立と之を云ふ
怪み給ひて奇びます
其の迹今に世に遺る

其三

天より出でて天還り
入るは道なり其の道を
天眞自性の天職は
伊邪那美神は泉つ國

其四

天先づ成りて地は後
母神の道世の中の
父大神は天つ國に
天は父なり地は母

第三節　日月大神劒玉誓約

橋をば作り給ひける
御寢ます間に仆れ伏す
丹波久志備の濱は是れ
口口傳ふ其の一つ

顯世畢りて幽世に
世に立て給ふ皇御祖
惟神なる大き道
此れには深き道あらむ

泉つ根の國遲からむ
子神に添ふの理か
還りて照らす日の少宮
根の國は子と定まれり

其一

建速須佐之男命には
山川動み國震りき
日の神驚き詔り給ふ
心善からじ吾れはもよ

其二

御髮を解き成す御髻に
左右の御美豆羅に
五百津御統勾璁を
千入の靭を負ひ給ひ

其三

伊都の高鞆臂に佩び
堅庭股に蹈みなづみ
伊都の男健び蹈み健び
御親にぞ待ち迎へ

天に上るの其の時に
此れは神性雄健なり
那勢の命の上れるは
手弱女なれど何避けむ

御裳を縛ひて袴とし
亦御髻にまた御手に
悉纏き持たし背平には
五百入の靭比良に附け

弓腹振り立て劒取り
沫雪なして蹶散らし
稜威の嘖譲を發しまし
何故上り來と問ひ給ふ

其四

須佐之男神答へます
只大御神命以て
吾れ白さくは母の國に
大神然らば此の國に

其五

今其の狀を請さんと
姉の命の御嚴顏を
日の大御神詔り給ふ
月の神白す各も〳〵

其六

安の河原を中に置き
日の大御神詔り給ふ
生れます御子男ならん
天の眞名井に振り滌ぎ

吾れに邪き心なし
吾が哭く事を問ひ給ふ
徃らんとして泣くなりと
汝勿住みそと詔り給ふ

雲霧渉りて參上る
起さんことは意はざり
如何に心を知るべきぞ
誓を立てゝ御子生まむ

相對き立して誓ふ時
汝の心清からば
言訖へ劒を乞ひ度す
佐賀美に噛みて吹き棄つる

其七

氣噴の狹霧に成る神は
次に狹依毘賣命にて
女神三柱生れましぬ
三柱女神生れますは

其八

須佐之男神乞ひ度す
氣噴の狹霧に男御子成る
其の御名稱へて正哉吾勝
右御美豆良御統珠

左の御手の珠に成る
右の御手なる珠に成る

其九

こゝに日の神御心に
詔り給ひける後の御子
多紀理毘賣命なり
次に多岐都比賣命
三段の劒に因りて成る
誓の靈驗現はれし

左御美豆良御統珠
正哉吾勝と興言す
勝速日天之忍穗耳命なり
氣噴の狹霧に天穗日命成り
天津日子根命なり
熊野久須毘命なり

月に惡しきの無きを知り
物實吾が物吾が子なり

先の女神三柱は
如此詔り別けて御子定め

其十

天は本なり地は末
男御子日の神本御魂
月日の光相通ひ
國玉神は此の神を

其十一

先に生れし女神は
多紀理毘賣命には
狹依毘賣命には
多岐都比賣命には

其十二

三柱大神天降り
紫蘇玉中津宮

物實汝汝の御子
御魂に基く道ならむ

天の御柱國御柱
女御子月の御物なり
奇びの御子ぞ現るゝ
君と仰ぎ妻と依る

其十一

各自〳〵の宮定め
瀛津島比賣奥津宮
中津島比賣中津宮
邊津島比賣邊津宮

青蘇玉置く奥津宮
八咫鏡をば邊津宮に

是れ神體の形なり
身形郡の名の起り

其十三

天之忍穗耳命をば
常に御腋に懷きまし
產靈の神の御孫女
生みます御子は

其十四

日月の神の御誓に
誓に勝つは月の神
其の女神は月御魂
惟神なる道ありて

其十五

皇御祖神其の初
現れみれば日の光

三宮に置き隱れり
豐國宇佐の島に坐す

日の神特に鍾愛み
育て給へば腋子とふ
玉依毘賣に御合ひまし
天照國照日子火明命なり

男子神女神現るゝ
御魂の本は日の御神
天つ日嗣の助け神
定まる位靈異かな

天の下知る君望み
月の光の二神

天に上るの道ぞある
大地知らす神はなし

其十六

天地泉の道ありて
是れ幽顯に出入し
此の道あるの大元は
大虛中の大御魂

其十七

伊邪那岐大神神功を
日月の神の現れを
大地君を定むるは
顯世幽世道立ちて
須佐之男神は夜見の國
日月の中に日嗣立つ
顯世幽世定まれり
誓の間に神成れり
產靈の神の三つ御魂
天御中主神坐して
畢へ給ふとの事の迹
御世の終とせしならむ
日月の神の道と知る
天皇命と日隅宮

惟神皇道歌　一名　眞澄鏡　中卷

第二編　神代中卷

第一章　月威滔天

第一節　月神殺保食神」

其一

日の大御神詔命り
保食の神ありと聞く
須佐之男神勅受け
御許に到り食物を

其二

豐葦原の中つ國
汝は就きて視るべしと
天降りてぞ其の神の
我れに與へよと乞ひ給ふ

鼻口尻より種々の
百取り机に作り設け
其の態をしも伺ひて
忿然作色りて詔り給ふ

其三

劒を抜きて撃ち殺し
日の大御神聞し食し
汝は悪しき神なれば
一日一夜を隔てまし

其四

一日一夜と傳ふるは
高天の原の神事を
只暫時の御怒りを
七日七夜の古事も

第二節　保食神靈瑞

味物をば取り出だし
御饗としてぞ奉る
穢き物と思ほせり
穢き物以て養ふか

其の事具に復命す
甚く怒りて詔り給ふ
吾れ相見まく欲せずと
離りてこそは住しけれ

顯世事とは異ならむ
此所に準へて神語り
一日一夜と示しけむ
物事變る時にこそ

其一

日の大御神更にまた
看せしめ給へば實にて
殺され死る神の身に
粟稗稻麥豆小豆

其二

悉取り持ちて奉獻る
此の物顯見しき蒼生の
粟稗麥豆陸田種子
天の邑君定めまし

其三

垂穎八握に莫々きて
天香山に桑木殖ゑ
絲を抽ぎて紝織の
高天の原に法立ちて

天熊大人を遣して
保食神身死りぬ
生り出る物多かりき
蠶桑の木牛馬も

日の神喜び詔り給ふ
食て活くべき物なりと
稻をば水田種子として
狹田長田にぞ殖ゑ給ふ

其の秋甚快く實りけり
蠶を養ひ口に繭含み
業は此の時始まれり
此の世の中の業となる

其四

月威忽ち殺す保食神
日神喜び百穀榮ゆ
日月の靈德神秘是れ
一日一夜の隔りは

其五

日の大神の御喜び
食ひて活くるは顯世の
生死なきの常世なり
咎なき者は其の儘に

其六

天つ御神や國つ神
顯世に出る其の時は
萬の業は異ならず
幽世に入る其の時は

月神に殺され身に物化る
一粒萬倍幸福無窮
開く日の神閉づる月
晝夜行易ふ道と知る

顯見しき人類食ひて活く
道にぞありける幽世は
常世の道に暗はなし
常世に還る道は是れ

顯世幽世出つ入つ
人を導く道として
飲み食ひ着るも有ぬらむ
元つ御魂の道にこそ

其七

蒼生の身は顯世の
飲み食ひ着るも道知らず
迷の心離れ得ず
大祓戸の道なるは

其八

泉津國なる神性は
醜女雷物あれば
鳥も獸類も魚虫も
人の心も食はざれば

第三節　月神暴威

其一

須佐之男神白さくは
男子神をこそ得たりけり
勝さび荒び健びつゝ
業に心を奪はれて
咎過に閉ぢられむ
夜母津國にや沈むらむ
天の益人救ふ爲め

豐豁野とて食ふの道
拾ひ取りてぞ食ふの狀
食ふより外に心見ず
迷ふことあり愼まな

清き明きの吾が心
自からにぞ吾れ勝ちつ
畔毀ち溝埋め樋放ちし

頻蒔き串刺し馬伏せて
また絡繩を引き亘す

其二

日の神新嘗聞こす時
其れとは知らで日神は
然はすれども日神は
咎め給はず恨みなく
新宮席に屎まりき
大御體は擧不平みぬ
御恩親の御意に
容忍給ひて坐しにけり

其三

詔り給はくは屎なすは
畔毀ち溝埋め其の事は
如此語り直し給へども
轉ある態いかならむ
醉ひ吐き散すと爲しつらむ
地を惜しと如此ならむ
惡しきは止まず轉あり
彌益に荒びけむ

其四

荒び健ぶる神性は
其の根の國を望ますも
人の身の腹尻なるは
自からなる泉つ國
神ながらなる道ならむ
汚穢き物ぞ集まりぬ

顯世幽世道同じ

其五

日神服屋に御座してぞ
服屋の棟を穿ちてぞ
日の大神は驚かし
天の岩窟に幽居ります

其六

世の中萬の物事は
惡神の喧響は
火を燎すとの傳へ言
荒振る神の災害も
善惡現はす神の道
神の御衣をば織しめき
生剝き逆剝ぎ馬を入る
御身を傷めて發慍りて
天地暗く常夜徃く
火を燎してぞ辨へき
狹蠅なす湧き妖發る
此の國事と知られけり
此の世の中の狀と知る

其七

天つ詞の太詞
道は天なり物は國
天地開闢る時の狀
幽顯出入物語り
天上天下道一つ
漂蕩ふ國の神や人

今にて云はば日食の

第四節　萬神奉禱

其一

八百萬神神集ひ
皇産靈神の命以て
思はしめけり此の神は
思はしむとは命にて

其二

心は凝る凝る心
心の性は津々、分る
津速産靈の神の御子
其の御子なるは八意の

其三

思慮りて白さくは
云云謀り爲してこそ
常夜往く世の事ならむ

其四

祈ぎ奉るへく神議り
八意思兼をして
思慮りの智あり
奥は皇産靈神ならむ

其五

凝り成る力心なり
分れて續く力なり
興臺産靈の神生る
思兼神現れませり

其六

彼の神御象を造り成し
招禱奉らめと白しけり

其の謀議に從ひて
取りて作れる日像

其四

彼の神象は天つ日の
彼のとは此れより指す詞
光華明彩し天地に
寫す御像眞澄鏡

其五

天麻比止都命には
天日鷲命には
長白羽命には
穀の木麻共一夜にて

其六

天羽槌雄命には
天御梓命をば
天の堅石また鐵
八咫の御鏡甚美麗し

御像寫して八咫鏡
幽居り給へば其れを指す
照徹らせる顯御身
大御光の大御神

刀斧鐵鐸作らせり
穀の木種ゑて白和幣
麻を種ゑてぞ青和幣
生ひ蕃茂れりと云傳ふ

文布荒衣織り成せり
神衣を織る長として

織女は天八千々比賣
荒衣和衣神衣は

其七

手置帆負彦狹知
大峽小峽の材を伐りて
瑞の御殿造らしめ
此の二柱神こそは

其八

櫛明玉命には
八尺勾玉五百箇なる
山雷神をして
五百枝眞賢木八十玉串

其九

如此種々に設け備へ
トへの事を擬ひて

此れは神衣和衣を
神衣祭の始とぞ

其十

天の御量り齋斧以て
齋鉏立つる齋柱
御笠矛盾皆共に
木工事の御祖なれ

其十一

是れ玉祖の神に坐し
御統の珠作らしむ
天香山に採らしむは
野槌神は野篤採る

其十二

兒屋根太玉二神
香山眞男鹿生捕りて
肩骨全抜き放ち遣り
肩骨燒きてト合しに

其十

是の時仕へしト合は
トは裏なり心なり
太兆と云ふ道は是れ
鹿ト龜ト蓍筮あり

其十一

天兒屋根命には
其の上枝には八坂瓊の
眞中に繋くる八咫鏡
天太玉神はしも

其十二

兒屋根命太祝詞
長鳴鳥を集めてぞ
天の波々迦を取り來り
謀事に御宇良合ふ

其十一

鹿トあるの起とぞ
見えぬ心を知るの術
示す隨々頼むなり
神籤口ト業多し
五百枝眞賢木根堀じ來て
勾玉取り著け中枝の
下枝には由布取り垂でて
太玉幣と取り持たす

其十二

神祝々て稱辭
互に長鳴き鳴かしむる

今の世鳥名子長鳴きの
鳥名子は今の庭つ鳥

其十三

鳥名子早鳴子の謂ひか
伊勢の神山に常に住む
神山離るゝ事ぞなき
進化なりとは仙境の
說言平田篤胤大人著仙境異聞に出づ

其十四

手力男神はしも
天宇受賣命はも
竹の節間に孔を彫り
木と木を取りて打ち鳴らし

其十五

天加奈止美命には
石戸の側に隱れ立つ
神樂なす長と爲り
吹き鳴せるは今の笛
安樂の聲に合せけり

其十六

香弓六張をおき並べ
長白羽神左右手に
金色の鵄此の時に
是れ倭琴の起にて

其十七

日陰の蔓を鬘とし
小竹葉を結ひて手草とし
石屋戸前に庭燎擧げ
神懸して言ひけるは
牟由那那夜許許能多理

其十八

胸乳掛き出で裳緒をば
高天原は動みてぞ
是れ其の時の俳優は
相ともなひつ歌ひ舞ひ

因緣こそ此れにあれ
曉告ぐる起は是れ

其十三

曉早く長鳴きす
雞此れは神子鳥
彼の鳳凰は雞の
傳へ言とて書にあり

其十四

手力男神はしも
天宇受賣命はも
竹の節間に孔を彫り
木と木を取りて打ち鳴らし

其十五

天加奈止美命には
石戸の側に隱れ立つ
神樂なす長と爲り
吹き鳴せるは今の笛
安樂の聲に合せけり

其十六

香弓六張をおき並べ
茅と菅と持ち彈奏づる
高幡の上に止まれり
須賀があるの因緣

其十七

天の眞拆を襷とし
鐸著けたる矛を持ち
覆槽せ置き蹈轟こし
比登布多美用伊都
毛毛智用呂都

其十八

蕃登に押し垂れ歌ひ舞ふ
八百萬神咲ひけり
神樂の起と爲にけり
浮かるゝ神も我れならじ

大御神には奇まれ
詔り給はくは人請へど
石戸を細目に開け給ひ
葦原國も闇けんを

其十九

宇受賣白さく勝りての
如此言之時太玉は
逾奇しと思して
隱れ立ちたる手力男

其二十

中臣神忌部神
控き渡してぞ此れよりは
時に鏡を石窟には
其の瑕今なほ存りけるが

また稱辭聞し看し
如是美麗しき言なしと
吾が隱れるは天の原
何故て宇受賣は樂する

其十九

貴き神坐す樂遊する
其の鏡をぞ指し出す
稍石戸より出て給ふ
御手を取りてぞ出し奉る

其二十

尻久米繩を御後に
還りましそと奏しけり
入れ奉りけり瑕着きぬ
伊勢に崇祕ぐの大御神

第二章　眞光力照徹

第一節　新宮御遷座

其一

天照日の大御神
兒屋根命太玉の
大宮比賣命をし
善言美詞を以て

其二

石戸別命には
天太玉命には
高天の原を統御す
今の世までも朝廷なる

其三

高天の原は幽り道
其の新宮に遷しませ
命は廻らす日の御綱
其の御前にぞ待らはす
宸襟を和すことのごと

其の殿門をぞ守衛らする
大殿御門祭りなす
大御稜威こそ耀けれ
御典の本は是れならむ
皇朝廷は顯事

口口傳ふ天の儀
廣き世の中神事を
其の疑も理や

第二節　宇宙清明

其一

日の大御神石窟戸を
天の下共自づから
衆倶に相見るに
手を伸し歌ひ舞ひ唱ふ
阿那多能志阿那

其二

日の大神出でましは
石戸開けし其の時の
日々照らす御光の
天地萬の物皆も

世の人知らで疑ひす
知る國もなし人もなし
天つ祝言知らざれば

其三

出御す時に天の原
照り明りけり萬神
面皆明白くなりにけり
阿波禮阿那於茂志呂
佐夜懃飫懃

朝日御上り拜みてぞ
面影をこそ想ひ知れ
毎日〳〵に新なり
歡ぶ心神ながら

其三

日食月蝕ありと言ふ
月日を障へて日食し
日の御光に昃はなし
春夏秋冬分るれど

其四

大虛空中の星國は
日の大神の御照しは
天岩屋戸の古事は
星國々の吉凶は

其五

八百萬神相共に
世の中開けぬ時として
月の御心荒び立ち
日の大神の御慍りに

地球と月の廻り合ひ
地球隔てゝ月食す
六合照徹道は是れ
地球の體の自然なり

千萬無量數知れず
大地の外星多し
地球と月の事と知る
其の國々にて定まらむ

歌ひ舞うての御悅
御稜威を知らぬ神や人
世の凶災は起りけむ
神人驚き祈ぎ奉る

其六

八百萬神神集ひ
卜兆に合ひ神懸り
日の御光は照り渡り
開くも閉づも神ながら

其七

岩戸の前の神樂歌
あな爽明おけ萬神
高天の原亦天の下
其の御喜び如何ならむ

其八

あな爽明とは竹葉の聲
古の書に如此解けり
木を振る音を何のその
暗き天地僅にも
其の眞心を盡してぞ
歌ひつ舞ひつ大神樂
畏き御稜威現れつ
日月の光こゝに立つ

天晴れ面白あな樂し
日の大御神出でまして
自からにぞ照り渡る
我れを忘れし狀ぞある

おけとは木の名振る詞
此れは後の世神樂かな
岩戸の前の歌ならむ
開けたる時の狀なれば

其九

萬の神の御心は
我れを忘れて是れまでの
措けおけ今の樂みは
實にも天晴の祝ぎ詞

其十

今世の人の伊勢參詣り
御蔭で良じやないか豐年ぞ
家をも身をも打ち捨てゝ
ええじやないかの其の詞

第三節　月神處罰

其一

八百萬神神議り
素戔鳴神に科はせて
解除の諄辭祓ひ竟へ

岩戸明けたる御喜
喜きも惡しきも打ち捨てゝ
心に殘る事なしと
心の底の聲ならむ

手も舞ひ足も躍りつゝ
喜び參る有狀は
心浮かるゝ事を見て
岩戸の前のおけならむ

千座置戸の祓へつ物
髮鬚爪を拔かしめき
天にな住みそ葦原も

根の國遠くとく往ねと

其二

素戔嗚神は初より
御身尊きの神なれば
大虛空の道底深し
逐はるゝ身は還られじ

其三

萬の神に逐はれて
青草結束ねて蓑笠と
衆神曰へり汝はも
如何にぞ我に宿乞ふと

其四

甚く雨降り風吹けど
蓑笠を着て家に入り
此れを犯すの人あれば

神等共に神逐ひ

根の國に入る思なり
天に上るも防ぎ得ず
罪あればこそ神逐へ
飫泉之竈の身と爲れば

天降るとき霖雨なり
着て衆神に宿を乞ふ
躬行惡しくて逐はれたり
共に拒ぎて宿かさず

辛苦みつゝぞ降りける
青草を負ふ人を諱む
解除を債る習なり

是れ大古の遺法

第四節　日神授二三女神一

後の世人の傳へごと

其一

更に上りて日神に
清き心の我が御子は
姉の命や平安くて
神等吾れを逐ひぬれば

永の別れを告げ給ふ
姉の命に奉る
天つ御國を照臨しませ
今根の國に罷りなむ

其二

日の大神は三女神を
三女神への御教は
助け奉りて其の祭る
今海の北道の中

素戔嗚神に授けます
道中に居て皇孫を
神と爲れとぞ宣り給ふ
道主貴と御名申す

其三

道の中とは根の國に
筑紫宗像奥津島

往くの道中上つ國
中島邊島海の北

亦豐國の宇佐島に
三女神は各自
天降りてぞ鎭れり
身形鎭む三宮に

第三章　神速須佐之男神經世神德

第一節　天外巡歷

其一

須佐之男神天雲の
新羅の國の曾尸茂梨の
此所は居らまく欲せずと
東に渡り出雲國
壁立つ極み廻りまし
所に坐して興言す
埴船造りて乘り給ふ
安來の所に到ります

其二

天の壁立つ極みとは
顯世にての夜母津國
日の本國は中つ國
此の大地の限りなり
根の國底の國は是れ
國の御柱立つの國

萬の國の都にて
神々集ふ天高市

其三

曾尸茂梨嘗完空國
森林なき新羅の赤原地
天雲壁立つ海原を
空國韓國同じ言
浮き寶をや望みけむ
居り給はぬも宜しこそ
廻りましての御心は
殖林開く基こそ

其四

父大神の御任命に
聞し食さずて啼泣ち
御怒受けて逐はれにき
海原治らせの勅宣
山河泣き乾し泣き枯し
漂ふ國を作り成す
其の初をや思ほして
御心こそは起りけめ

其五

御心安くなりぬとは
壁立つ極み廻りまし
本つ御國の出雲にぞ
着きまし給へる事ならむ
出雲の國は母神の
鎭りませる所にや

謂れありなむ比婆山に

其六

淡海の多賀や淡路洲
出雲の國と木の國は
木の國此れは根の國に
遠き神代は木と出雲

第二節　國家經綸輕重

其一

韓國の島金あり
吾が御兒所御す國にしも
御鬚髯散せば杉なれり
眉毛樟とぞ成りにける
檜端宮柀はしも
詔り別け定め喰ふべき

其二

葬し祭るの傳へあり

其三

伊邪那岐神鎭まれり
伊邪那美神を祭りけり
出で立ち給へる迹ならむ
內外往來ふ御門と知る

其四

銀もある國なれば
浮き寶なくて佳らめや
胸毛は檜尻毛柀
杉と樟とは浮き寶
奥津棄戸の具とす
八十の木種も播き生す

御子五十猛神はしも
筑紫を始め大八洲
有功之神と御名稱へ
妹二神木種殖う

其三

五十猛神有功神
天の壁立つ遠き國
韓神とは底國を
皇朝廷は敬ひて

第三節　斬二妖蛇一得二神劍一

其一

簸の川上に到りまし
其の由問へば蛇來て
名は足名椎妻手名椎
其の名を問へは國神
天より樹種持ち下り
青山成して殖ゑましき
木の國大神是れに坐す
大屋津比賣と抓津比賣

其二

勇み武きの神にまし
巡り開きて韓神
作り固めし御名ならむ
宮內省に齋ひけむ

其三

老夫老女の泣くを見る
童女を喫ふと泣き語る
女眞髮觸奇稻田比賣
大山津見神の子

其　二

蛇の形問へば云ふ
頭八つあり尾八つあり
其の身の長さ谿八谷
其の腹見れば悉く

其　三

詔り給はくは其の女
恐けれども御名知らず
白さく然らば恐けれ
湯津抓櫛に取り成して

其　四

蛇を殺すこと告げて
此れには理由無からめや
湯津抓櫛に取り成すも
謂れなき身を如何にせむ

目は赤酸醬身は一つ
身には蘿及檜杉生ひ
峽八尾にしも度りけり
常も血あえ爛れけり

如何にや吾れに奉れ
吾れ日神の伊呂勢なり
勅の隨に仕へなむ
御髻にしも刺し給ふ

先づ女をぞ望みます
因緣を結ぶ爲ならむ
亦御髻に刺すことも
蛇を斬るの道も立つ

其　五

足手名椎に詔り給ふ
垣を作りて八つの門
假庪に酒槽船毎に
待てよ汝の爲として

其　六

其の酒なるは毒しき酒
一回ならず幾回も
毒酒とは咮強く
今の世ならば酒精にや

其　七

汝の爲に殺さむと
八稚女喫ひし蛇とは
惡しき蛇も見給はず
奇稻田比賣の爲にこそ

果を持ちて酒造れ
其の門毎に佐受伎結ひ
八鹽折とは彌搾り
吾れは蛇を殺してむ

八鹽折とは彌搾り
絞りて滓を取るならむ
飮めば忽ち醉ふと知る
飮めば醉ふ酒毒しき酒

詔り給ふこそ畏けれ
初めて聞くの語り言
知らで殺すの道あらじ
救ふの業もあるならめ

其八

足手名椎の神はしも
待ちける時に其の蛇
爾に蛇に詔り給ふ
如何でか饗せざる可きと

其九

蛇船ごと頭垂れ
こゝに蛇は飲み酔ひて
須佐之男神御佩の
簸川血に變り流れけり

其十

蛇の骸段ごとに
中尾切る時御刀の
怪しと思し割き見れば
此の大刀異物と安置き
御教のまゝ設備へ
言しが如く來りけり
汝は畏き神なれば
其の口ごとに酒を入る
八甕の酒を飲みにけり
留り伏して寢ねたりき
劍を抜きて切り散らす
簸川の名は血の川か
雷に化り天に飛ぶ
乃少しこそ缺けにけれ
都牟刈の大刀別に有り
御許に齎ぎ給ひけり

其十一

蛇の住める上みれば
叢雲の劍の名ありとぞ
後に改め草薙の
蛇を切りて劍の名は

第四節　造須賀宮並八雲神詠

其一

宮造るべき地求ぎ
吾れ此所に來て我が心
須賀の宮をぞ造る時
夜久毛多都　伊豆毛夜幣賀伎
都麻碁微爾　夜幣賀伎都久流　曾能夜幣
常に雲立ち騰りけり
是れ御劍の御稜威にや
劍と云ふも由來あり
大蛇の尾玉世に傳ふ

其二

須賀の所に到りまし
須賀すがしとぞ詔り給ふ
雲立ち騰り歌ひます
櫛稻田比賣命をば
須賀の宮をし作る時
救ひ迎へて御妻神
出雲八重垣妻籠に

立つ八雲こそ神ながら
清々しきの御心は

其　三

比賣を救ふの事無くば
立つ叢雲は卽てまた
仇なす蛇中々に
其の御劒は畏くも

其　四

岩戸隱りの其の時に
八俣蛇は身の內に
蛇を斬りて御劒を
其の道行きの纏りて

其　五

足手名椎の神に詔る
稻田宮主神の名を

瑞の籠所と定まらめ
夫婦の契りの奥深し

叢雲劒も得まじきを
八雲八重垣作りけむ
御劒をこそ持ちにけり
日の大神の御稜威なり

御劒落す伊吹山
其の御劒を持ちにけむ
日の大神に獻る
由緣なるこそ奇なれ

吾が御子宮の首たれ
二柱にぞ賜ひける

櫛名田比賣神の御子
此の神後に國を引き

其　六

御子神を產む其の處
久麻々々しきは隈締り
比賣神御心然もあらむ
自然なる神性は

第五節　神子性德

八島士奴美神にます
國引きませる神と稱ふ

其　一

速須佐之男神の御子
詔り給はくは此處はしも
知らす山々廣からむ
廣き高きの山心

其　二

國忍別命には
都留支日子命あり
吾が敷きますの山口と
入口として御樂
御詞中に現るゝ

吾が敷きますの處はも

國形宜しと詔り給ひ
國形宜しとは風景か
止まず見むとぞ宣り給ふ

其　三

磐坂日子命には
國稚く好し畫鞆なす
千早振る世の神代にて
面足の神惶根の

其　四

衝杵等乎留比古命
詔り給はくは吾が心
吾れ此所にしも鎭らむ
御名にてぞ知る此の神は

其　五

青幡佐草日子命
方結と云ふ名ぞ遺る
經津主神山を見て
神の御心優美なり

惠曇の鄕にて詔り給ふ
吾が宮此處に造りなむ
畫鞆なせるの國形は
神の性こそ思はるれ

其　四

國巡らして多太の鄕
明く正眞しく成りぬなり
故其の所多太と云ふ
猛く正しき軍神

其　五

高麻山邊に麻を蒔く
此の山の上に御魂坐せ
亦此の神の坐す所
麻を稱へて大草か

其　六

神の御前の青和幣
初めて麻を蒔き給ひ
御魂を鎭め給へるは
御功こそは後の世に

第六節　大小須田出

其　一

大神佐世の葉頭刺しまし
其の所をし佐世と云ひ
御子神等の彌廣に
佐世の木の葉を御頭に

其　二

高麻山とぞ稱しける
大草の名も遺りけり
青幡麻草青和幣

麻は御衣の寶物
青畑榮えて佐草比古
麻業守る神と知る
傳へ弘まる麻の業

其　一

踊躍り給ひて其の葉落つ
後の世長く名ぞ殘る
榮え給ふの御喜び
かざす御心其れならむ

此の國小き國なれど
木石に著けじと詔り給ひ
鎭め給ひて大須佐田
須佐の鄕には正倉あり

其　三

朝御饌夕御饌勘養の
五ほ嚴なり組調理
朝夕調御の御庭にて
御名を遺して須佐田とは

其　四

其の昔には須佐びまし
今大須佐田小須佐田を
嚴贄處定め置き
御名を傳ふの御心の

其　五

國處なり吾が名をば
己命の御魂をし
小須佐田をしも定めます
正倉は穗倉神庫なり

其　三

五贄處と定めます
勘養神養神の御食
大神自から定めます
深き御心ありぬらむ

其　四

樋放ち溝埋め御田荒し
定め給ひて神養の
御魂鎭めて後の世に
深き尊き事を知る

月は根の國底の國
世の中開く大御稜威
朝夕變る其の中に
是れ世の中の御祖なり

第七節　御年皇神等

其　一

神大市比賣命には
此の神の御子御年神
是れ庭津日神に坐し
奥とは內庭臺所

其　二

亦の御子あり阿須波神
此は座摩の御巫の
生井榮井津長井の
此の神等は國民の

吉事凶事現はして
月日の神は表裏
千萬物は生り出づる
世の人如何で忘るべき

大年神を生み給ふ
奥津比子比賣二柱
諸人齋ぐ竈神
嚴贄組の處なり

波比岐神の二柱
齋ぎ祭るの神に坐す
三柱共に齋ひます
家居を守り給ふなり

其　三

香山戸羽山戸二柱
大山咋神も御子
大土御祖神も御子
佐々津比古神三柱と

其　四

羽山戸の神の御子の神
若山咋と若年神
夏之賣秋毘賣久々年と
大年御年若年の

其　五

皇朝廷は毎年に
天つ祝詞の大祝詞
奥津御年を手肱に
泥かき寄せて取り作る

亦大神の御子の神
近淡海の日枝に坐す
稻依比女と千依比賣
度會縣に坐し給ふ

其　六

八神坐して其の御名は
若沙那賣神彌豆麻岐神
久々紀若室葛根神
神は御年の皇神等

御年皇神等の前
稱へ奉りて御祭は
水沫かき垂り向股に
方束穗伊加志穗初穗なり

水沫かき垂り泥寄すは
其の本はしも皇神の
其の理を現はして
神ながらなる皇道

第八節　國引神業

其　一

八島志奴美神はしも
其の由來は八雲立つ
初國小く作らせり
志良紀の三埼國の餘り

其　二

童女胸鉏大魚の
三身の綱を打ち掛けて
河船毛曾呂毛曾呂に

御年を作る人の業
御魂幸はひ然せしむ
稱へ白すの太祝詞
顯世幽界二つなし

國引きませる神にます
出雲の國は小き國
吾れ今作り縫ひてまし
ありやとみれば餘あり

支太衝別けて穗振り別け
霜黑葛來るや來る
國來々々と縫へる國

八穗米杵築の御埼にて

其三

新羅の國を割き來り
海の外なる國を引く
八島志奴美神の御名
八十國大十島神の國

其四

北門埼なる國を引き
高志の國なる都々三埼
北門は國の北門なり
都々の御埼は一ならで

其五

御父大神國巡り
根の國底の國邊まで
世の中開く御心の

堅めし加志は佐比賣山

縫へるは八穗米杵築なり
神の稜威ぞ道廣き
外國迄も知らす神
大八洲とは即て其れ

北門良波なる國も亦
共に引き來て縫ひませり
海を渡るが越の國
所々の餘る國

天の壁立つ極なり
八十島周り其の時に
道の定めや立ちぬらむ

五十猛神韓神(漢土共)

其六

御母櫛稻田比賣神
御心受けて淤美豆奴の
淤美大水即て海
清の湯山にまし〳〵て

其七

國引き訖へぬと詔り給ひ
意宇とは嘆聲神業の
此の神詔は八雲立つ
如此宣り給ふ因緣にや

第九節　大國主神出現

其一

天冬衣神の御子
七つの大名持の神

其れに對へて八島主
稻田は彌灘廣き海洋
神は八島野主の神
御稜威八島手持の神
海原島を知るならむ

御杖衝立つ意宇の杜
成る見て休む御心か
出雲の國の名とぞなる
八雲立ち籠む清の宮

大國主神生まる
是れ國作大己貴

葦原醜男は神性の
大國御魂は荒御魂

其二

大物主は和御魂
和魂共に國作り
大地主神なるは
顯國玉幽事

第十節　月神入根國

其一

須佐之男神詔曰はく
吾れ私に安置めや
日の大神に上奉る
岩屋に屏る其の時に

其二

須佐之男神然る後
高きを嫉妬まる世評語
大地神靈の顯御身

其三

是れ幸御魂奇御魂
廣矛杖の八千矛神
大地官と御名宣らす
治め主宰ぐ人魂を

其四

天叢雲は神劍
葺根神を遣して
詔給はくは我劍ぞ
伊吹山にぞ落しける

其五

熊成の峯に坐し〳〵て

根の國にしも入り給ふ

其一

月の光の二面
月夜見神は和御魂

其二

古語傳へ二つあり
月夜見尊の傳へあり
天地泉の三つの國
月の光の表裏

其三

人も知るなり人心
春夏秋冬變れごも
是れ荒魂和魂
天地泉の道なるは

其四

御祖伊邪那岐大神は
即て月夜見神に坐す
滿つる光と暗き夜と
須佐之男神荒御魂

其五

保食神を殺しゝを
速須佐之男神とせり
泉は月なり夜母津國
晦朔二面

喜怒哀樂の分ちあり
月日の循環る象なり
幸魂なり奇魂
神人の身に現るゝ

日月の神を生みまして

神功畢りて昇天す
大國主神出でて
根の國に入る御心は

其十一

大虛中より天地泉
天つ大神國つ祇
日の大御神中心主
須佐之男神裏に立つ

其十二

根の國底の泉つ神
伊邪那美神坐しませど
己がまにまに亂るゝを
蛇の室屋や蜂の室

惟神なる道と知る
須佐之男神世を去れり
神性なれど時ぞある

其十一

乾坤立ちて日月星
八百萬神道開く
月夜見神相配び
天地泉の道は是れ

其十二

八種の雷公亦醜女
母神にては稜威なし
須佐之男神入りまして
比禮振る術も立ちぬらむ

第四章　大國主神建國神業

第一節　聖仁救免

其一

大國主神庶兄弟
八十神等は稻羽なる
共に稻羽に行く時に
氣多の前にぞ到る時

其二

八十神兎を欺きて
高山の尾に伏し居れと
其の鹽乾くに隨ひて
痛み苦み泣き伏せば

其三

大名牟遲神問ひ給ふ

八十神坐せど國を避る
八上比賣をし婚はむと
大名牟遲神俗負ふ
赤裸なる兎伏す

其二

海潮を浴みて風の吹く
兎は實と聞き受けつ
身の皮風に吹き析かる
大名牟遲神來ります

其三

汝の泣くは何故ぞ

兎は答ふ淤岐に在り
鰐を欺き族類の
其の族類は悉に

其四

吾れ其の上を蹈み走り
汝は吾れに欺かる
吾を捕へて吾が衣服
先の八十神教あり

其五

教へ給はく今急に
其の身を洗ひ蒲の黄
教の如く爲せしかば
兎云へらく八十神は

其六

偖をば負ひ給へごも

此の島にしも度らむと
多き少き競べてむ
氣多の前まで列伏せり

地に下むとする時に
云へば端なる鰐はしも
剝ぎ取りにけり故に泣く
吾が身悉傷はる

水門に行きて水を以て
取り敷き散し輾轉てよ
本の如くに癒えにけり
八上比賣をば得給はじ

汝命ぞ獲給はむ

此れは稻羽の白兎
八上比賣には八十神に
大名牟遲神にしも

其七

八十神怒りて殺さむと
此の手間の山赤猪あり
汝待ち受けこれを取れ
猪に似たる石火以て燒き

其八

大名牟遲神待ち受けて
御祖の命哭き患ひ
神產靈神命以て
遣して作り活さしむ

其九

蚶貝比賣は伎佐宜集し

兎神とぞ今に云ふ
汝等には言聞かず
吾れは嫁はむと答へけり

共に議りて云ひけるは
吾等共々追ひ下す
取らずば汝を殺しなむ
轉し落し追ひ下る

取れば燒き著き御死りぬ
天に參上りて請ひ白す
蚶貝比賣と蛤貝比賣
故二柱命受く

蛤貝比賣は水を以て

母の乳汁と塗りませば
蚶貝刮げ焦し割る
蛤貝產養乳汁以て

其十

八十神見てまた欺きて
大木切り伏せ矢を茄めて
卽ち氷目矢を打ち離ち
哭きつゝ求め木を析きて

其十一

汝は此所に在るならば
大屋毘古神の許
八十神覓ぎて矢刺す時
御祖命母神は

第二節　入根堅洲國

其一

麗壯夫と成り遊行く
石より離すことならむ
養ひ育つるの義にや

率ゐて山に入りにけり
其の木の中に入らしむる
拷ち殺しけり御祖神
取り出してぞ告げ給ふ

八十神の爲滅されむ
急行けとて遣り給ふ
木の俣よりぞ脫逃る
刺國若比賣命なり

大屋毘古神議りまし
根の底國に參向りてよ
命のまにま參到る
父大神に告りますは

其二

大神出で見て詔り給ふ
如此詔り給ひ喚び入れて
妻神蛇の比禮を以て
其の蛇咋はむとする時は

其三

敎の如く爲せしかば
來る日の室屋呉公蜂
先の如くに敎へける
比禮は鰭なり振る器物

其四

須佐之男神の御許なる
大神必ず議りなむ
須勢理毘賣神出で見合ふ
甚麗しき神來ます

葦原醜男と云ふ神ぞ
蛇の室屋に寢しめます
夫に授け告げますは
比禮三度振り撥ひませ

蛇靜まりて平く寢ぬ
亦其の比禮を授けてぞ
其の比禮振りて安く出づ
人の身ならば領巾や袖

大野に射入る鳴鏑
其の野に入れば火以て燒く
外はすぶ〳〵と其所蹈ば
火は燒け過ぎて鼠來て

其五

御妻須勢理毘賣命には
父大神は死りぬと
家に率て入り八田間なる
虱を取らす御頭は

其六

牟久の木實と赤土とを
其の木實をば咋ひ破り
大神吳を咋ひ出すと
御妻神御心盡さずば

其七

大神其の矢を取らしむる
鼠來て云ふ內ほら〳〵
落ち入り隱る其の間
鳴鏑矢咋ひ持ち奉る

其八

喪具持ち哭き來たる
野に出でたれば矢を捧ぐ
大室屋にて御頭の
吳公のみこそ多くあれ

夫に授く御妻の神
赤土を含み唾出す
愛く思し御寢ましぬ
如何に危き御身ならむ

葦原醜男は國中の
美女は醜女の敵とは
八十神俗を負はしむも
侮辱を受けて負ふ俗

其八

八上比賣神嫁はなむと
須勢理毘賣神目合ひし
初めて見ての御心に
大神醜男と詔り給ふ

第三節　聖慮神活氣宇呑世

其の大神の御髮握り
五百引き石を室戶塞へ
生大刀弓矢天沼琴
沼琴樹に拂れ地勤響る

第四節　大命降下

八十神憎惡むの事ならむ
今も昔も人心
侮る心と知らるなり
是れ萬代の福の神

御答へあるこそ賢けれ
御婚ひ給ふぞいと尊
甚麗しき神と告ぐ
御聖慮中ぞ思はるる

室屋の椽に結ひ著けて
御妻須勢理毘賣負ひ給ひ
取り持してぞ逃げ出づる
御寢ます大神驚かす

御寢ます室屋引き仆す
遠く逃げ行く平坂に
其の持つ生大刀生弓矢
坂の尾毎に追ひ伏せて

其　二

大國主神と爲り
吾が女なる須勢理毘賣
底つ石根に宮柱
居れ是奴よと詔り給ふ

其　三

大名牟遲神還りまし
通ひ坐す時社前に
滑磐なるかと詔り給ふ
若須勢理とは麗しき

橡の御髮解かす間に
大神遙に詔り給ふ
汝が庶兄弟をしも
河の瀨毎に追ひ撥へ

宇都志國玉神となれ
嫡妻として宇迦の山
高天の原に氷木高く
天の下知る大御稜威

若須勢理毘賣の命にぞ
石あり其の上滑なり
故其の地滑狹なり（地名）
嫡妻なるの御名にこそ

第五章　建國大業

第一節　征伐八十神

其　一

大國主大神は
城名樋山とは其の地
青垣山の國內には
持てる生太刀生弓矢

其　二

是れ國作の始にて
來次と云ふの名ぞ殘る
矢を立てたるは矢內鄕
生大刀弓矢の其の名こそ

其　三

八十神伐たんと城造す
名樋とは神奈備社なり
八十神置かじと詔り給ふ
阪毎瀨毎に追ひ撥ふ

追ひ廢て追ひ及きし其の所
射梁立て射し矢代鄕
神代の迹ぞ世に傳ふ
大神護る御魂なれ

嫡妻と立つ須勢理毘賣
天つ國より降る時
根の底國に入りますも
大國主の神の身を

第二節　八上比賣神

其　一

八上比賣神はしも
大國主神美斗阿多波志
畏みまして其の子を
故木の俣の神と云ふ

其　二

是れ座摩の御巫
生井榮井津長井と
生井眞清水榮井析(掘井)
阿須波婆比伎の神共に

齋す天の沼琴こそ
日の大神や賜ふらむ
惟神なる道ありて
持ち受け給ふ者にこそ

其　一

先に契りし如くにて
率て來ませども嫡妻を
木の俣にしも狹み置く
是御井神亦の御名

其　二

伊都伎奉るの御井神
御名三柱に稱へけり
津長綱長深き御井
新年祭の稱詞

第三節　少彦名神出現

其　一

大國主神平國けて
人聲海の上にあり
暫時ありて小き神
佐々伎の羽をば衣服にし

其　二

卽ち取りて掌中に
其の御頰にぞ齧みつきぬ
其の名を問へど答なし
谷具久白す久延彦知らむ

其　三

此れは產靈神の御子
神皇產靈神にしも
詔り給はくは我が子なり
伊佐佐小汀に御食せす
驚き見れど物はなし
天の蘿摩の船に乘り
海水の隨に浮び來つ

其　四

置ゑてし視れば跳り來て
怪き物と思ほして
所從の神も知らずとぞ
久延彦を召し問ひ給ふ

其　五

少毘古那神と云ふ
使を遣りて申し上ぐ
手俣より脫き落ちつ

汝葦原醜男神

其四

少彦名神の御名
少御神とも稱し
產靈神の長子神
曾富騰の足は歩行ねど

其五

曾富騰はそほづ案山子
神の幸は靈異なり
言靈助くる國なれば
平田篤胤名を稱へ

第四節　五百個神鉏

其一

大名牟遲神小名牟遲
御心力を戮せまし
兄弟と爲り國作れ

其二

一つに手間天神
亦の御名をば小名牟遲
顯す久延毘古山田曾富騰
天の下知る神に坐す
山田畑守る神と云ふ
八十玉串の道同じ
敬ふ人に御蔭あり
幸魂奇魂千寄彦

其三

二柱神相並び
國巡りして作る時

伊弉諾神の麻奈子なる
五百津神鉏取らしてぞ

其二

加武呂は神王御祖なり
今世に立つの二柱
五百津神鉏野を山を
開け造れの祖心

第五節　固造浮漂國地一

其一

五百鉏受けて二柱
浮き漂うて水月なす
葦原國の名の起原
大地東の表國

其二

日の本大和の國なるは
熊野加武呂岐命には
二柱神に事依さす
事依さすとは國作
高き功績を成さしむと
漂ふ海濱川邊をも
加武呂心と知られたり

其三

葦原菅を殖ゑ生し
國地をぞ造りける
神の功德は千代八千代
亞細亞と云ふも葦原か
國の御柱本なれば

修理固成る初にて
八十島八十國大八洲
齋衡三年二柱

第六節　藥湯温泉開基

其一

大名牟遲神遠延伏す
大分速見湯下樋より
暫間あり活き起ちて
蹈み健びしの跡處

其二

伊豫の國なる温泉是れ
人の病を惯みて
伊豆の國なる神湯また
下樋は地底湯脉なり

其三

天の壁立つ極みまで
漸々成すの神の道
今歸るとの神告あり

小牟遲神活さむと
持ち度り來て漬浴す
眞塵間寢ぬかと詔り給ふ
湯の中石の上にあり

其四

二柱神相議り
藥湯泉湯を始製めます
箱根の元湯是れにして
天の下には數あらむ
宇都志伎人草救はむと
烏獸や昆虫の
禁厭法を定めけり
百姓は悉に

其五

禁厭術の濫觴は
蛇蜂吳公の比禮の術
少彦名の神はしも
酒は藥の元なりと
常世に在す石立たす
祝ぎ狂ほして祀り來し
息長足姫命
酒をさゝとも人は云ふ
病を療す方を立つ
災異攘はむ爲にとて
今の世までも傳はりて
恩頼を蒙れり

其六

蚶貝比賣と蛤貝比賣
神の靈異の御蔭なり
酒を造りて久斯神
後の世までも諺す
少御神の豊祝祝
酒ぞ餘さず飲せさゝ
神壽々て祝ひます
いざ〳〵飲まなと祝言す

其一

大國主神はしも
吾等が作りし國なるは
少彦名神はしも
或は成らざる所あり

其二

少彦名命には
莠實れるの時にしも
常世の國に渡ります
所謂志都岩屋とは

其三

常世の國とは何所にや
常世に在す石立す
何所と知らぬ國所
少御神は天地を

第八節　大物主神出現

其一

大國主神愁ひ詔る
此の國誰れと作らなと
海原照す光あり
天の蔭矛を取り持ちて

其二

能く吾が前を治めなば
若然らずば國成らじ
然らば汝は誰れなるか
奇魂とぞ答へます

其三

今は何處に往まなむか
吾れをば齋ぎ奉られよ
大三輪大物主神

其一

吾れ獨して如何にせむ
詔り給ふ時忽然に
素裝束浪末に
依り來る神あり詔り給ふ

其二

吾れ共ごもに作りなむ
大國主神は問ふ
吾は汝の幸魂
然り汝は吾が御魂

其三

倭の青垣東山
御室を營り鎭めます
御室山とは此の所

是れ和魂神にます

其四

大國主神はしも
廣矛を以て御杖とし
八千矛神と御名稱ふ
物とは強き力なり

第九節　御年神靈瑞

其一

大地主神はしも
御年神の御子神は
父神怒り營田にぞ
苗の葉忽然枯れ損ね

其二

大地主神こそは
御年神の祟りなり
狹井社は荒魂
其の和魂相共に
邪鬼撥ひ國作り
大物主も其れならむ
後世にては武夫か

其三

御田人に食はす牛完
御饗に唾き還ります
蝗をしも放ちけり
篠竹の如成りにけり
片肱巫占へしむ
白き猪白き馬と雞

献りてぞ解めませ
御年神の御示しに

其三

種々御教ありければ
苗の葉はまた茂りてぞ
皇朝の神祭に
後の世今も獻る

其四

片巫は志止止鳥(巫鳥鵐)
竈の輪米占是れと云ふ
仕巫の名は神願ひ
尊き神も知らざるは

第十節　徴二行沼河比賣家一

其一

八千矛神高志の國

教への隨に謝しけり
實に吾れの意なり

御教のまにま行へり
豐に稔る年穀
白き猪白き馬雞を
由緣こそ此れにあれ

肱巫は今の俗の
其の術今は人知らず
神に仕ふる官なり
巫に問ふ神の道

沼河比賣を婚はむと

其の家にしも到りまし
八千矛の神の命は
高志の國に賢女を
在り立たし婚ひに
未だ解かすて襲布をも
鳴すや板戸を押ぶらひ
吾が立せれば青山に
雉子は響む庭つ鳥
鳴くなる鳥か此の鳥も
天走使ひ　事の語言も此をば

其　二

沼河日賣未だ戸を開けず內より歌ひけらくは
八千矛神の命　奴延久佐能(萎草如)女にしあれば吾が心浦洲の鳥ぞ　今こ
そは千鳥に在らめ　後は那鳥に在らむを(慣鳥)　命は勿死せ給ひそ青山に
日が隱らは射干玉の夜は出でなむ　朝日の咲み榮え來て栲綱の白き手腕

歌ひ給はく其の歌は
八洲國妻覓ぎかねて遠々し
有りと聞かして佐婚ひに
在り通はし太刀が緒も
未だ脫かねば少女の
吾が立せれば引づらひ
鵺は鳴き佐野つ鳥
雞は鳴く(なり)慨嘆くも
打ち止めこせねいしたふや
沫雪の若如胸を徐撃き撃きまたがり(眞似然)　眞玉手指し卷き　股長に
寢は爲さむを　阿夜爾(危疑的)勿聞しそ八千矛神の命事の語言も此をば

其　三

八洲國內に妻覓ぎて
越の國とは海を越え
國引き給ふも高志の國
內外の國の往來はも

第十一節　國主嫡后萬世照臨

其　一

嫡后なる須勢理毘賣
日子遲大國主神
裝束し立す其の時に
其の御鎧に蹈み入れて

其　二

射干玉の黑き御衣を　眞具に取り裝ひ　澳つ鳥胸見る時　翼ぎも此れは
得難にしてぞ路遠き
外國ならむと思はるゝ
韓國新羅の國ぞある
神代の習と知られけり

其　三

甚く嫉妬みます
倭に上り坐さむとて
片御手鞍に片御足
歌ひ給へる其の御歌

不良ず　邊つ浪磯に脫ぎ捨て　翠鳥の青き御衣を　眞具に取りよそひ澳つ鳥胸見る時　翼ぎも是も良はず　邊つ浪磯に脫ぎ捨て　山縣に蒐ぎし紅茜着き　染木が汁に染め衣　眞具に取り裝ひ　澳つ鳥胸見る時翼ぎも是し良し　基戀哉の妹の命　群鳥の吾が群れ徃なば　引け鳥の吾が引け去なば　泣かじとは汝は云ふとも　倭の一本薄項傾し　汝が泣さまく朝雨の　狹霧に立むぞ　若草の妻の命事の語言も是をば

其三

神歌の狀を能く見れば　比興の調賦とも見ゆ
黑き青きの御衣をば　裝ひたれごも翼ぎて
是れ不良ずと脫ぎ捨る　赤きは翼ぎ良しと着る
御衣は比にて妻定め　翼ぎ見るは慣れ心

其四

着ると捨つるは人心　良否定むは興と爲る
甚戀哉の妹の命と　更に詞を改めて
大國主の神心　現し給ふぞ眞實心なる

吾が黨去らば如何にする

其五

此の時片御手鞍に繫け　吾が妻思へと慰言
行くも止るも此所に在り　片御足をば鐙蹈み
今は泣かじと云ふ迚も　泣も咲ふも遠からず
若草の妻の命と語言　吾が去る後は悲まむ
御心餘りて言深し

其六

倭の國に上ります　其の御心や如何ならむ
倭の國は葦原の　都なるらむ高市あり
上ると云ふも出雲なる　邊つ國よりぞ云ふ者か
出雲の國の宇迦の山　大國主神の本鄕

其七

出雲を離れ給ふこと　徒にはあらじと思るゝ
嫉妬む御心の　治り難き爲ならむ
思ふも云ふも畏けど　夫妻の契も是れまでと

御心定めて御語りか

危機一髪の境かな

其八

大國主神の身は
國作り竟へ給ひては
御嫡妻なる須勢理毘賣
出雲の國を出で去らば

其九

倭の國に上るには
附き從うて群鳥の
國作らすの神業も
善きも悪しきも御妻神

其十

大國主の神心
其の御心を聞かむとて
言葉に餘る御心は
御祖大神教へあり
顯國玉神となる
其の業助くる爲ならむ
御教を蹈む道絶えむ

其十一

一神ならで國つ神
群れ立つ如き狀ならむ
宇迦の山とは離れなむ
御心一つに定まらむ

其十二

甚戀哉妻と思ひつゝ
妻の命と言ひ殘し
御答を待ち給ふらめ

大御酒坏取り持し
八千矛の神の命や
打ち見る島の崎々
若草の妻持たせらめ　吾はもよ女にしあれば汝措きて男はなし汝除きて
夫はなし　綾垣のふはやが下に(柔軟なる衾)　蒸被にごやが下に(優美なる衾)
拷衾爽ぐ下に泡雪の若やる胸を　拷綱の白き腕徐撃き撃き眞似然　眞
玉手　玉手指し卷き寢をし爲せ　豐御酒獻らす　八千矛神の命　事の語
言も是をば
如是歌ひて誓結し

其十三

立依り指擧げ歌ひます
吾が大國主こそは男に在せば
搔き見る磯の崎落ちず

其十四

御后神は御酒坏
頂掛りて今に至り鎭ります
指擧げ給ひて歌ひます
取り持ち給ひ立ち寄りて
御酒坏こそは御祝なれ
是れ御心の誠なり
天の下知る大神と
吾が大國主と呼び
敬ひ仰ぐ御聲なり

其　十三

國を統宰く道として
到る所に妻あらむ
治むる國の經營を
御后神の正道を

其　十四

如是御心を定めまし
御心安く寢まさぬと
嫉妬むる迹もなし
泡雪白き胸の內

其　十五

誓結なすは千代八千代
後の世今に至るまで
其れと御傳へ無れども
止り給ひ其のまゝに

然も男に坐す御身なれば
其の理を諾ひて
勇ませ給ふ誠こそ
明かにしも現せれ

其　十四

如是御心を定めまし
御心安く寢まさぬと
嫉妬むる迹もなし
泡雪白き胸の內

其　十五

誓結なすは千代八千代
後の世今に至るまで
其れと御傳へ無れども
止り給ひ其のまゝに

頂に御手を掛け給ひ
鎭り坐すは日隅の宮
倭の國への出御は
鎭り給ふと思はるゝ

其　一

胸形奧津宮に坐す
御娶ひて其の子二柱
妹高比賣命なり
高日子根神御辭なく

其　二

高き屋に坐せ高橋に
船にて八十島率て巡り
こゝに大神哭く由を
夢さめ問へば御津と云ふ

其　三

石川渡り坂の上に
其の津の水を汲み出し
國造神吉事
多紀理毘賣命にし
男神味鉏高日子根
八握御鬚の生るまで
晝夜甚く哭泣きます

登り降りて養しけり
動搖しませど哭き止まず
夢に願へば通ふとぞ
何處と問へば出でましつ

至り止り此所と云ふ
御身沐浴ぎます三津は是れ
奏すの時に其の水を

汲み出で用ふる習とぞ

其四

昧鉏高日子根命
多伎都比古神産む時に
此處は御祖の向位
神名樋山の西に在る

其五

邊津宮高津比賣神の
八重言代主神
沼河比賣神生み給ふ
山代日子命あり

其六

大國主神の御子
中に十五神
天下なる國人に

云ふは吉事の例なり

后は天御梶日女
多吉村にてぞ斂へます
此處にて生まば吉りなむ
石神其れは御魂なり

生み給へるの御子の名
妹高照比賣命
健御名方神に坐す
若布都主命あり

百八十餘り一神
珍子とぞ稱へける
恩頼を蒙らす

八十國八十島統治す

第十三節　佐太大神生

大國主神なれば

佐太大神を生むとす
御祖支佐貝比賣命
失せたる弓箭出で來ねと
角の弓箭ぞ流れ出づ

其一

天女支佐貝比賣命
其の時弓箭失せましき
吾子麻須羅神ならば
願ひ給へば爾時に

其二

所生し御子は詔り給ふ
取りて擲廢て給ひけり
之を待ち取りて詔り給ふ
射通し給へば其の時に

其三

加賀の神崎是れにして
御祖の社此處に坐す

此は弓箭には非ずとて
金の弓箭ぞ流れ來る
闇き岩屋なるかもと
光加加明也加々と云ふ

佐太大神坐す所
窟屋の邊行く人は